演藝畫報

第十一年 第九号

特輯・鮮滿芝居の旅

20 SEN

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年八月三十日印刷
昭和十一年九月一日發行（毎月一回）
「演藝畫報」第百二十號 第十一年九月號

胃酸過多症

胃痛、惡醉

二日醉、溜飲

酒・煙草の のみすぎ

ノルモザン錠は、珪酸アルミニウム（腎家用ノルモザン）を主成分とし之にロートエキス薄荷腦を配した錠劑で、胃酸制止・胃粘膜保護・鎭痛の効果を併有する學理的製劑です。

ノルモザン錠は、胃壁を全面的に防護して、胃液の刺戟を去り、胃酸の過剩分泌を抑制し、胃粘膜過敏による疼痛を鎭め、オクビ、ムネヤケ、胃のモタレ、キミヅ等の症狀を除いて安全に治癒に導きます。

制酸・鎭痛・劑

ノルモザン錠

【價格】

一日分（二〇錢）
三日分（五〇錢）
約一週間分（一圓）
十六日分（二圓）
一ケ月分（三圓五〇）
二ケ月分（五圓）
各地藥店にあり

發賣元　大阪市道修町　株式會社　武田長兵衛商店

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理

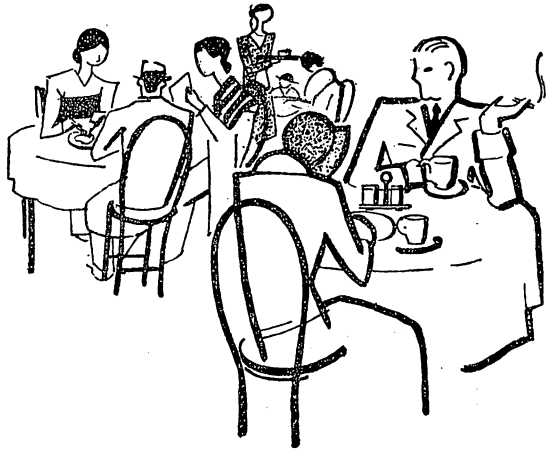
芝居情緒と食道樂

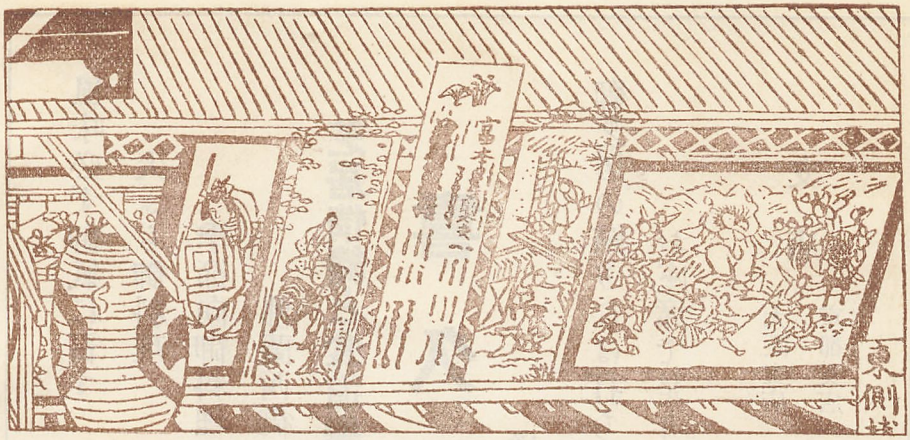
喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！

支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋





★道頓堀　九月號　目次★

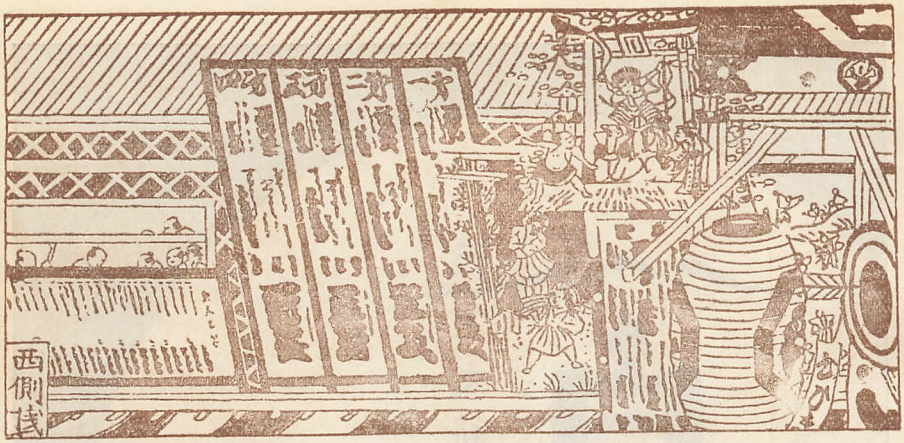
トピラ（貢）　長谷川小信

★延若の盛綱
★壽三郎の或る日の大石
★扇雀他オール出演の「伊勢音頭」
★若手合同の「宮本武藏」
★扇雀・小太夫の「生きてゐる小平次」
★小太夫・菊次郎の「かさね」
★オリンピック大記錄
★藝者になつた家庭劇三人娘
★家庭劇の「流轉綺譚」
★村松氏も舞臺に「東海美女傳」
★美談「吉岡先生」
★「馬市の秋」關西新派
★「小平次神樂」舞臺面
★新國劇の舞臺に立つた長谷川伸氏
★新國劇の「仇討禁止令」

新國劇と私の劇曲……長谷川伸（一四）
左團次と歌右衛門追薦……伊原青々園（一七）
素人劇評の是非……額田六福（一八）
この頃の芝居……食滿南北（二〇）

傍白……大木戸徹（二二）

伊勢音頭上演に際して……片岡我當（二四）
宮本武藏……大澤休象（二三）
伊勢音頭解題……山川聽雨（二四）



●名女優戀愛放談帖……紅文山人（四四）
○扇雀さんと錦吾はん赤目探勝の記…げんた生（四九）

本誌特輯　觀て來た鮮滿を語る……栗島狹衣（三六）
市川右團治（四〇）

映畫の秋……股野慶二郎（五四）
柳川芝居街……岸本水府（五三）

リボントウドウ
セクシヨンヨシ

ドウトンボリ・セクシヨン……櫓万平（三五）
お芝居艶物集……大槻たもつ（一六）
東西松竹少女歌劇樂屋噺……千塚榮（二八）
心藏は強い……妹背平三（三〇）
家庭劇三人娘樂屋訪問……富田英三（三〇）

▣演劇飛行便……大橋孝一郎（四三）
▣編輯後記……源多德三郎（六二）

★表紙（寫樂）……（妹背平三氏藏）

カット……山中虹二

天下之銘酒
白雪
シラユキ
頃よし
酒よし
酔心地よし
灘・丹伊津摂
小西酒造株式會社

近江源氏先陣館

實川延若の盛綱

神戸・松竹劇場にて

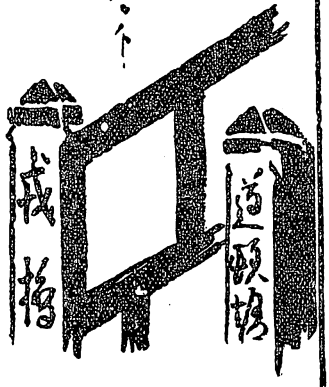
「大石最後の一日」　　阪東壽三郎の大石

（神戸・松竹劇場にて）

鰻と鄙料理

川菜

魚料理



柴藤食堂

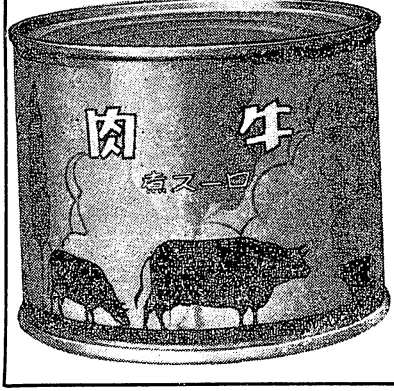
二階 椅子席

三階 宴會場

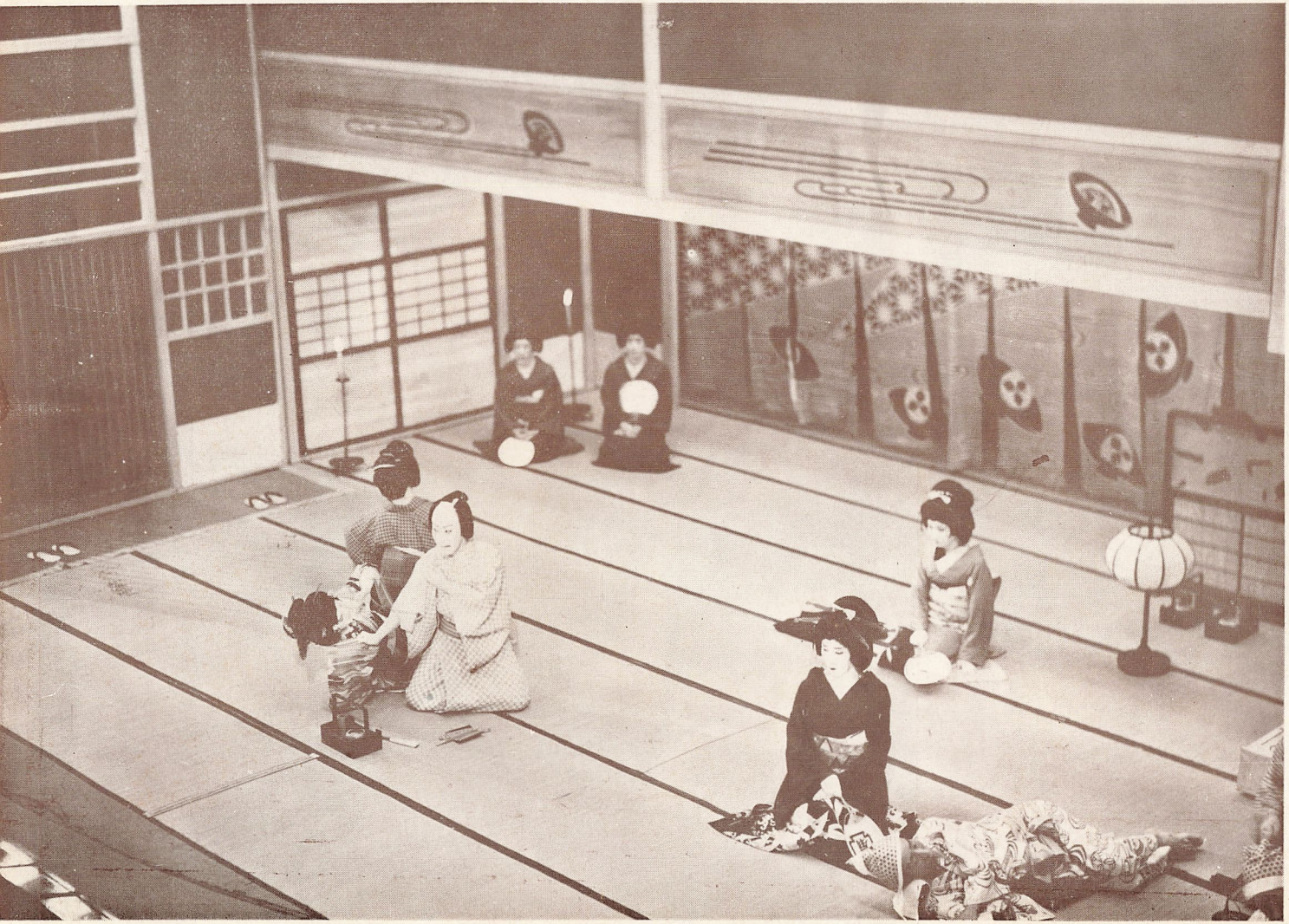
電話南 四八一〇 九五二 四八四四

金鶏印罐詰二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい



洋酒・食料品・罐詰問屋
大阪市東區豊後町三番地
株式會社 横山商店



「伊勢音頭戀寢刄」

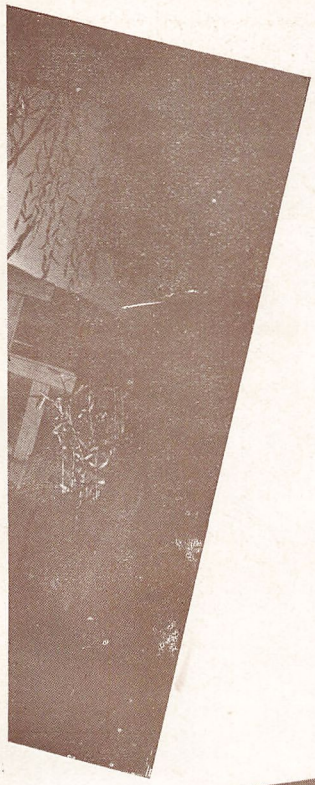
お馴染の上方狂言の代表もの、名優鳄治郎の殘せし型と美の構成、代々何れもこゝに傳統をつたへて

福岡貢(扇雀)、萬治郎(珏藏)、林平(小太夫)、おしか(鳄之助)

大藏(九團次)

東西合同若手歌舞伎

浪花座　九月興行



東西合同若手歌舞伎

（浪花座九月興行）

「色彩間苅豆」

歌舞伎の至寶と稱せられる大舞踊、絢爛凄絶の其の舞臺面、六代菊目五郎が親しく指導せる好演技、然かも清元連中にはこれ又新人清元梅壽太夫と清元和佐三との出語り

（小太夫の與右衛門と菊次郎のかさね）

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇

南地ホテル

一宿 三圓
二圓半額
一泊 一圓半

南地戎橋電停前
電話南四一四・四四一

「生きてゐる小平次」

錯綜せる情痴世界の舞臺化、特異の表現式は新人俳優にはうつてつけの名狂言

小平次　扇雀
多九郎　小太夫
おちか　菊次郎

—九月興行の浪花座—

林長二郎演出

歌舞伎レヴュウ

伊勢音頭

九月十一日初日

青春座公演

花田須磨子　國光博子
雲井八重子　里村葉子
秋月惠美子　大隅豊子
靜波秀子　瀧川はやみ
美浪スミ子　大磯千鳥

その他出演

★近日上演★

青春座公演
港の朝霧
OSSK公演
ふるさとの唄

秋の大劇

住宅の御新築は

○深い經驗
○洗練された技術
○親切な施工
○安心して委される

大林組住宅部へ

大阪市東區京橋三丁目七五
電東八六〇—八六五

「宮本武藏」

大朝滿都の讀者を魅力でグングンひきつけ、今や興味の絶頂
優俳年青るた溯遡にゝこ、說小トツヒ大の來近ためしら至に
。るな化劇るな全完りよに

上　成太郎の通おの　・　小太夫の武藏　・　扇雀の澤庵

下　八又の藏廷　・　甲おの吾錦　・　菊次郎の朱實　・　小太夫の武藏

東西合同若手歌舞伎・浪花座九月興行

松竹家庭劇

中座　九月興行

「流轉綺譚」

小織の植木屋平
十吾の玩具屋助
兵屋
そお母さんの嫁に來る橋

K・S・S・O　かうらし座入三劇庭家たし度今が娘妓藝は
・・・・ネで「虫取灯」やい（・・・・デコド）すでたつなに

石河―小鈴
千種―多美子
松榮―秀子
月丘―富彌

中 「街のオリンピック」の舞臺面

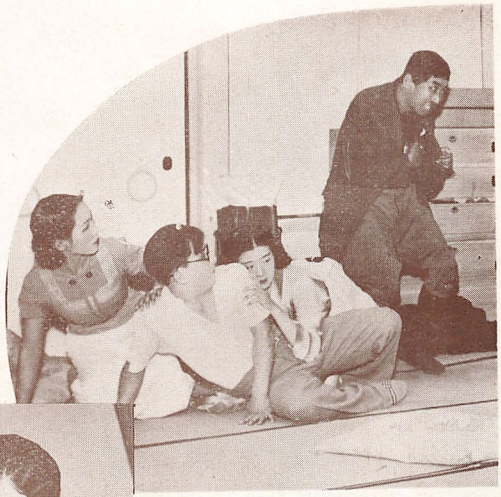
そのまゝそのまゝスキッチを切らないでお願ひです〳〵、四ツ子を生んだ記錄……

上 「灯取蟲」

……さり乍ら義理といふ字には誰もが抗し得ない人の世のおきて。

元安の——南洋產業經理課長 高山

東の——小鈴の妹露子



下 「流轉綺譚」

世の幾變轉ほど不思議なものはない

石河の——娘 お道

天外の——戸外保雄

上　中田の石雲齋、村松氏、梅の井の鶴姫、寺田の鐵砲與四郎

右「東海美女傳」の原作者村松梢風氏は大の梅の井びいき三十一日の稽古には、わざ〳〵角座へやつて來て、演出上の注意を與へ、菱富の辨當に「大阪のものは旨い」と滿足の舌鼓を打ち上機嫌でカメラに入つた。

角座の關西新派

「吉岡先生」

昭和九年九月二十一日、通り魔の如く襲つた關西未曾有の大風水害に幾多殘された美談中の美談……

娘　八重子——若葉蘭子

吉岡訓導——瀧　蓮子

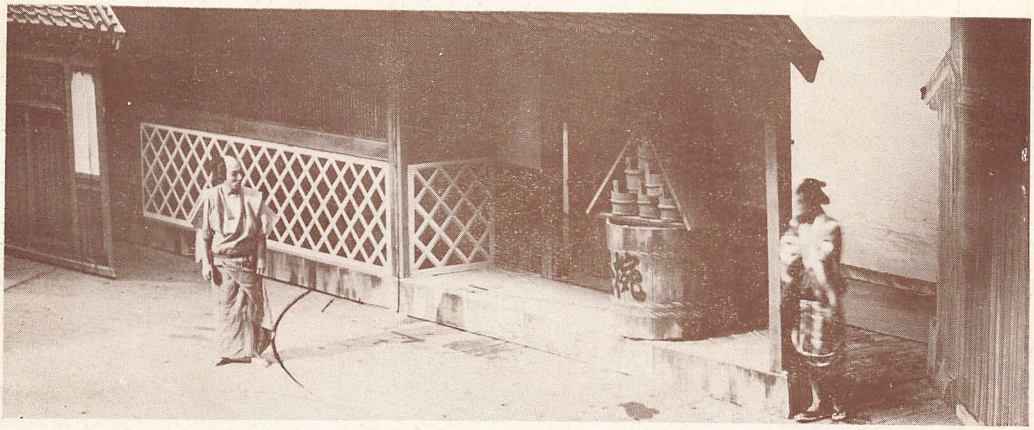
「馬市の秋」

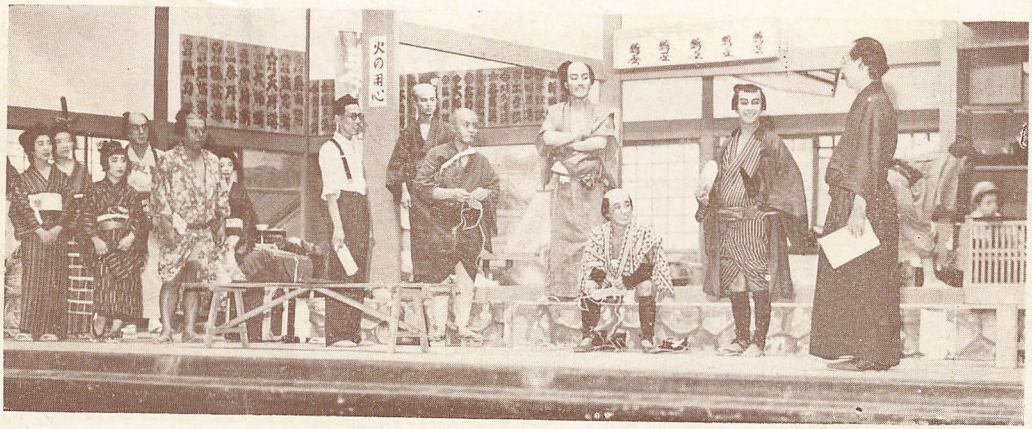
失業した樽職の太一は哀れな女房おさんに當り散らし乍ら、暗い旅をつゞけてゐました。彼等が北海道長萬部に着いた時は、丁度馬市のあつた日でした。太一は此處でやけ酒を呷り、果ては恰で馬でも賣る樣におさんと嬰兒美代子を賣つて了ひます。彼らの上に再び逢ふ日が果して來るでせうか……

都築の……太一
梅の井の……妻お吉

「秋の市馬」

右より
都築の山崎太一
中田の六助
六條の六助の妻





大阪歌舞伎座　九月興行

「澤田正二郎追善興行」

上　「仇討禁止令」　中　「小平次神樂」の舞臺面

下　長谷川伸氏も舞臺に、一座熱心な舞臺稽古

新國劇

澤田正二郎追善公演

九月一日初日

毎日四時半開幕

1 仇討禁止令 三幕

2 海の兄弟 二幕

3 小平次神樂 二幕

殺陣 田村一幕

◇初日は三時半開幕◇

初日は各等割引値段

◇全館冷房◇

大阪歌舞伎座

・日曜祭日・マチネー

午前十一時半開幕

1 仇討禁止令 三幕

2 海の兄弟 二幕

殺陣 田村一幕

カユミ止
蚊よけ
チック型

SKI スキー

毒虫ノ襲來ヲ防ゲ

蚊、蠅、蚤、南京虫、蟻、毛虫

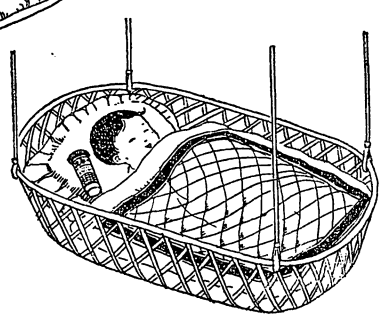
等嫌ナ毒虫モ**スキー**ノ使用ニ依テ完全ニ驅逐ス

カユミヲ止メヨ

之等毒虫ノ刺スコトニ依テ起ル**カユミ**ヲ即座ニ解消スル新劑ニシテ大人ハ勿論幼兒ト雖モ度々使用スルニ何等皮膚ヲ害セズ又發汗ノ防害ヲモナサズ無脂肪性ナレバ感觸ヨリ佳香ニ富ム且瘙痒部ノ搔傷ニヨリ化膿菌ノ侵入ヲ防ギ皮膚炎ノ豫防ヲナス

價四十錢

蚊や南京虫に攻められて



スキーの御蔭でスヤ〳〵と

デパート藥品部・藥店ニ有リ

製造發賣元 光榮商會

大阪市東區伏見町三丁目二七

電話北濱三三一五番

振替大阪三三一一七番

キッコーエー醤油
伏見で生れる
天下の銘醸
マルタケ醤油
丸竹醤油株式會社

各電鐵車中廣告
同沿線看板廣告
同待合ポスタ掲出
大阪全市浴場廣告
同電車ポスター型廣告
輕氣球掲揚廣告

荒木廣告社

◇道頓堀松竹座地下室◇

一般宣傳廣告取扱

岡本商事社

大阪市西成區通一丁目橘園内
電天下茶屋二一一五番

月刊・演劇研究・雜誌

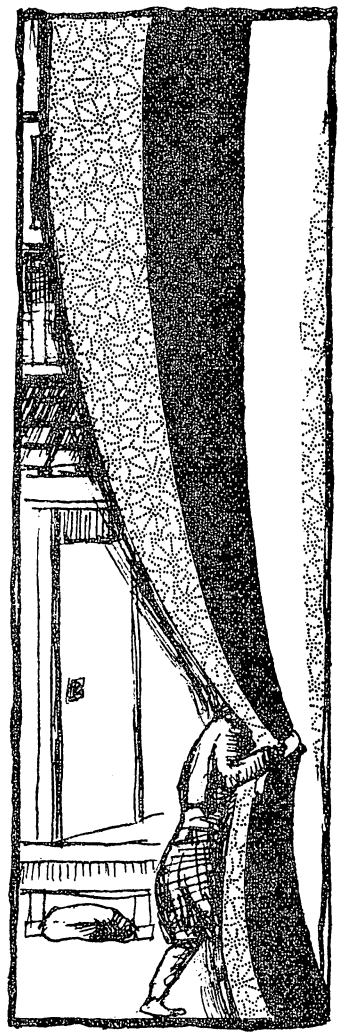
演藝畫報

第十一年

九月號

第百二十輯

道頓堀



第十一年・第九號

九月號

第百二十輯

「新國劇と私の劇曲」

長谷川伸

故澤田正二郎君とはぢめて會つたのは、麻布の藝者屋の二階に私がゐたときで、案内してきたのは日本演藝通信の丸山耕君だつた。丸山君はその後も、澤田君と私との間に一つの役割を持つた。

私は澤田君にそのとき頼まれたことがあつた、すぐ引受けた。これは澤田君個人のことでなく、東京に於ける新國劇の地盤を創設に就いてであつた。本來からいへば澤田君は私よりもT君といふ人に、そんな事は頼むべき順序であつたのに

いきなり私の處へきたのは、どういふ考へだつたか、いまになつては忖度するより他はないことである、多分、私を買被つたのだらう。

で、賴まれた事を私は果した。新國劇は東京に確固たる地位を摑んだ。

年月は流れ去つた。

私と澤田君の對面はその後なかつた、私は新聞生活から退き去つて、原稿生活におぼつかなくも入つた、十一年前のこと。

新聞の背景をもたなくなつた私の許へ、何故の退社ぞと血相變えて駈付けたものが、藝界の人ではただ一人ある、それが澤田君、ではなかつたのだ。

新しく打つて出た作家としての私は微力だつた。新聞記者としても終りまでヒラ記者であつた私は、作家になつても、多少の異色を認められたが、地位といふが如きものは出來なかつた。たとへば、時の報知新聞が雜報に、所謂大衆文藝の作家をズラリと取上げ、何くれとなし一括して記事にしても、私の名はその中に無かつた、といふが如き有樣であつた。

そのころ、澤田君は私の小說を劇化すべく、可成り强引に手をつくした如く、考へていい事に往々ぶつかつた。

しかし、澤田君は私にそんな事を、傳言一ツすらしないでやつてゐた。その一ツは敵討鎗諸共の劇化計畫だつた、結局實現はみなかつたが、この爲に澤田君は何百圓か持出してゐるに相違ないことを、後に私は知つた。

私は澤田君が、振はない私といふ作家に、氣勢を添ゆるべきことを考へてゐたなぞとは、すこしも心付かずにゐるうちに、不振時代が私にやつてきた。

京都に假寓してペンを折るか原稿生活をつづけるか、迷ひながらその日その日を昏く送つてゐるうち、澤田君は南座で花々しく興行した。私は觀に行かなかつた。

私に奮起の決心がつき、曙光を强いて認めやうとする氣が出た、京都を去つて東京に歸つたのが一月だつたらうか。

そのころ私は耽綺社といふ制作會の同人で、研究と制作の爲めに、東西の恰度中程だといふので、名古屋で例會を開い

てゐた。三月の中ごろか、例のごとく名古屋で例會を開いてゐると、珍らしく東京から私に電話がかかつた、澤田君の代理で俵藤丈夫君の聲が聞えた。話は『掏摸の家』を新國劇で上演したいといふのだつた。

耿綺社の同人は私の應答を聞いて、殆ど歡聲をあげるばかりにして、喜んでくれた。花輪を耿綺社として贈らうといふ話が出たが、私は辭退した。口に出してはさすがに云はなかつたが、傲岸ながら確信を私はそのとき既に持つてゐた。私の物が上演されるからとて、花輪をくれたのでは、その費用に耐へられなくなるに極つてゐるといふ氣だつたのである。

もつとも、それまでに私の劇曲は四篇上演されてゐたので、傲岸と確信とを混合して持つに至つたのであつたらう。

後で判つたことだが、澤田君は私の作品を探してゐたが見付りかねてゐた、然るに、事頗る偶然に、劇曲探しに奔走中の俵藤君が、丸山耕君の事務所へ電話を借りに立寄り、そこで談たまたま一幕物で現代物で三四十分のものを探し拔いてゐるが無いといつた、丸山君はそこでかういふ物があるのだが知らないのだらうと示したのが、私の掏摸の家である。俵藤君はそれを持つて逸散に澤田君の許に歸り、澤田君は一讀して上演と決定し、俵藤君が私の家に來たのが夜に入つてからだつた。私が名古屋にゐると聞いて、長距離電話をかけて、上演の承諾をとつたのである。

私は高慢と自尊心をひそかに高く持つてゐたので、そのころは澤田君の私に對する考へ方を、忖度なぞしてゐなかつたが、私に上演料を送つてきた額が、それまで他所で貰つた額の倍もあつた、それでも私は心付かなかつた。

『掏摸の家』の次に『沓掛時次郎』が澤田君によつて上演され、私の劇曲に對する熱は漸く拍車をかけられた。澤田君が他界してから私は『股旅草鞋』をかいた。故松居松翁氏が、『澤田が生きてゐたら、さぞ喜んだでせうに』と私にいつたが、私は微笑しただけだつた。私には傲岸があつた。

しかし、間もなく、私は、澤田君の依囑を果した事によつて澤田君から報謝を支拂はれたことに漸く心付いた。

私は澤田君をおもひ出すとすぐ、『支拂はれた』ことを考へる。

私に劇曲作家としての成長があるとすれば、促進してくれたものの中で特筆すべきは故澤田正二郎君であつたことを牢記してゐる。（十一・八・二二）

左團次と歌右衛門の追薦

伊原青々園

東京では、十月に先代左團次の追善芝居があるといふ、既に團十郎も菊五郎も盛んな追善芝居があつたのだから、明治三大優といはれた左團次に對しても同樣の催しがあるのは當然なことである、そうして左團次の分も團菊と同じやうに、いづれ大阪へも持込まれるだらうが、東京根生えの團菊を大阪で追善するのと違つて、大阪出身の左團次を大阪で追善をするのは、遙に意義のある仕事である、何うか、それが實現されて盛大な景氣を見たいものだと思ふ。

その左團次の追善が濟むと、現代の歌右衛門と吉右衛門との發企で、三代目歌右衛門の記念碑が池上の本門寺へ建てられ、同時にその追善芝居が催されるといふ。今日でこそ歌右衛門は東京の役者であるが、三代目までは全く大阪の役者で、江戸へは偶に遣つて來たゞけである、その記念碑が東京へ建つのは、大阪の勢力が東京へ進出することになる、大阪の人は大いに誇るべきである。

それに歌右衛門の記念碑ばかりでなく、中村と名乘つた人たちを集めて中村會といふのを拵へるさうな、これには歌右衛門系のほかに、中村勘三郎系統のものも何うせ參加する事となるだらうが、歴史からいふと歌右衛門派と勘三郎派とは互ひに無關係で、全く違つた家柄である、元祖歌右衛門の師匠は中村源左衛門で、その源左衛門の師匠は中村勘三郎だと書いた文献もあるけれど、それは根もない誤りで、勘三郎は江戸に於ける梨園の名家だが、上方には別に中村千彌といふ名優があつて、源左衛門はその千彌の門葉になる、隨つて源左衛門の門弟の歌右衛門が勘三郎派でない事は無論である。

その歌右衛門派が、四代目が江戸生れだつた關係から、今日では現代の歌右衛門をはじめとして、大いに東京にはびこつてゐるけれど、本元の大阪では現に梅玉一家があり、鴈次郎一家

がある、いよ〳〵中村會の人たちが目下の劇壇で優勢となつた場合には、東京ではあまり珍重されてゐない上方歌舞伎の復興するやうな機緣となるかも知れない、そうしてその上方歌舞伎の復興こそ、單調もしくは乾燥に陷つた今日の舊劇に油をさす事となるであらう。

素人劇評の是非

額田六福

八月號の○○（それは日本で有力なる思想的高級雜誌）の劇壇寸評と云ふ欄に、新國劇を評して『……ともあれ客の集ることは結構だが、聞く處によれば、まるで稽古もせずにブツつけに初日を出す樣な事をしてゐる』云々と書いて、新國劇から抗議されて、九月號で取消してゐる。誤つて改めるに憚るなしで、サツパリとして潔い話であるが、もし、これが新國劇の當事者の目に丈けふれなかつたとしたらどうであらう。勿論抗議文も出す、その記事はそのまゝとして、大多數の讀者に信用されて仕舞つたであらう。實に寒心すべき事だと思ふ。尠くとも、かゝる大雜誌の劇壇評を受持つ位の人ならば、新國劇はどんな稽古ぶりをしてゐるか、新派はどう、歌舞伎はどうと、それ位な事は噂でも知つてゐる可きだと。劇壇唯一の稽古熱心なこの座をさう云ふ風に評する事は、あまりにも事情にうとすぎる。

○

これで思ひ起さるゝ事は、近頃、東京の新聞で行はれる、素人劇評の事である。朝日が先鞭をつけて、讀者その他でもそれ

にならつてゐる。我々當事者にとつては他山の石で、なか〳〵結構な意見をきく事もあるが、中には隨分一人よがりの、勝手氣まゝな放談をきく事も可なりあつて、甚だ迷惑に思ふ事がないでもない。十年目に見る——なぞと云ふ人から、正しい認識が果して得られるであらうか。

○

勿論、批評する事は見物の自由である。天下の愚作を傑作と云はふと、大傑作を愚作と云はふと、各人の勝手、自由であるが、これが、△△紙とか○○紙上に現はれると、讀者はそれを、署名人□□氏の個人的の意見と見なさずして、その社全部の意嚮、もしくはそれが正しい輿論であるかの如くに考へて仕舞ふ危險性が多分にある。この危險性はその新聞なり雜誌なりの信用が大きければ大きい丈け倍加する。

○

云ふまでもなく、劇評その物の眞使命は、たゞ、面白かつたとか、面白くなかつたとか云ふ丈けではない。（それならばたゞの評判記である）現在を批評すると共に、將來への背路導精神がこめられてあらなければ、權威はない。寧ろ無用だ。

○

現劇壇の第一人者○○○○氏は（特に名を秘す）『それでも職業的劇評家より勝つてゐる。彼等は○○してゐる』と云はれてゐる。（舞臺座談會記事參照）不幸にして私も、その說を否定しかねる。けれども、前述の素人劇評の危險さを忘れる事も出來ない。

○

結論として、私の云ひたい事は、素人評家を求める場合、各紙とも、その人選に十二分な注意を拂ふ事を希望する。たとひ僅少でも指導的精神をもち、啓蒙的な親切さをもち合せてゐる人でありたく思ふ。近時、觀客層の增大と共に、芝居の內容がいちじるしく低下してゐる事は爭へない。先日も岡本先生からも『大正十年頃と比して、隔世の感がある』と云ふ慨嘆のハガキを。

それは、獨り、劇評家の罪ではないが、こゝらで、誰か、不偏不黨、識見ともすぐれた劇壇を指導する大劇評家の出現を待望する。

（八月廿三日）

この頃の芝居

食　滿　南　北

私は私の關係をしてゐる芝居の外の芝居はあまり拜見しない。拜見したくつてもその餘暇がないのと、可なり自分の職務だけでもより多くの芝居を觀なければならない爲、さうさう手がイヤ眼がまはらないのである。其處でこの頃の芝居と云つても、私の周圍だけのものである事は無論だ。處が觀たところによると此頃の芝居には

『洒落氣』

が尠なくなつたやうに思ふ、この洒落氣といふのは、フザケタ意味のものではない、眞面目な中の洒落氣なのだ。所謂トボケタ處がないと云ふのである。昔の歌舞伎にはさうした色が濃く出てゐたと思ふ。また役者にもさうした人が多かつた

九代目團十郎とか五代目菊五郎。さうして私は識らないが初代實川延若あたりにはさうした一面が多分に盛られてゐた其處が歌舞伎の奥行のあるところではなからうか。北の梅田で團十郎の

『二人袴』

を觀た時、私はビツクリした一人であつた。五代目菊五郎の番頭善六を觀て、また私はびつくりした、さうして今代延若氏から、父君の舞臺の逸話を聽き、又先代の型だと云ふ。

『乳貰ひ』を觀た時、成程昔の役者には奥行があると思つた私は今の方々があまりにも常識が發達してゐるセイではなからうかとも思つてゐる。

亡くなつた巴流（市川新升）がよく云つてゐた。

『舞臺で芝居をしてるのやと思ふたらこんな阿呆らしいことおまへん』

と其處だ、其心持が故人をして一燈園へ去らしめたのだ

『洒落氣』

をもつと故人につぎこんで置きたかつた。私なんかは

『フザケすぎる』
方かも知れないが、何にしても私は
『奥行』
と云ふものがあつてほしいと思ふ、近頃では六代目の「一本刀」にやゝそれがうかゞはれる、亡くなつた鴈治郎の紙治などには
『洒落氣』
がワウィツしてゐたものだ。
それから私は近頃のお役者衆は非常に御器用だと思ふ、これはよいことか惡いことかは問題である、どうも昔の人は不器用だつた。實川正朝といふ女形がソソリの時ふか七か何かやつて耻かしさうにしてゐたのを知つてゐる、かほるといふ同じく女形さんが、光秀をやつて、
『爺ぢやぞよ〳〵』
といふ處がどうしても
『母ぢやぞよ〳〵』
といふ風に聽こえたなんどは全く豪いと云ひたい。
若し今の方にソソリといふものをやらしてごらうじろ、恐らく面白くはなからう。マア箱登羅さんに力彌でもやつてもらふか。延二郎さんに師直位より外にあるまい、よし子ちやんなら、由良之助でも、勘平でも、九太夫でも面白からう、けれどこれはマア女の事、かりに中村扇さんに賴んで皆やつて貰らふとして、由良之助も、師直も、ぜげんも、勘平も、おかるも、九太夫も、判官も、若狹之助も、それこそ狸の角兵衛でも何でもやれる、それでどれを觀たつておかしいなんか思はれまい。それが器用すぎるところで、
『狹く深く』
と心がけて貰らひたいと思ふのである。
その上に故人中村鴈治郎はやはり豪かつたと思ふ。兎も角も豪い存在には、
『その人の得意』
といふものが可なり狹く定められてゐる。
私はまたこんなことも考へてゐる。
『女優』
だといふふれこみで、
『女形』
を一人コツソリこしらへるのだ、あくまでも世間は
『女優』
にして置くのである、妙なことを云ひ出して、此頃の流行の
『變態』
を擔ぎらふのではない。何のためにこんな事を云ひ出したかはマア御察しにまかす事にしやう。
まだ〳〵云ひたい事もあるが、別に貴重な紙面をさいてまでベラ〳〵喋舌る程の事でもない。

傍白

大木戸　徹

ヒョッコリと渡來した映畫監督スタンバーク氏が、東京歌舞伎座を觀劇して、先づ何に驚いたか。彼は日本のカブキに於ける舞臺技巧といふよりも、生々しい「殺陣の演技」に感服したといふ話がある。いや、感服どころではなく、吃驚したのかも知れない。恐らく「殺陣」は獺之助の森の石松道中記の大詰で、猿之助の石松が渡世人十數人を相手に長脇差を拔いて大立廻りをやる。獨眼流の石松の、エイッ、ヤッと掛聲諸共、顏面を鮮血に染めて悶死する者、肩先の噴血を押へてのけ反る者、立ちどころに十數人の兄哥連が、石松一人のために血に染つて倒れる。スタンバーク氏が一驚し、嘗つ感嘆したのは即ち「鮮血迸る悽慘な情景」ではなかつたか。彼は日本のカブキの藝術的な夢を追ふて歌舞伎座へ來たのだが、そこには夢ではなく「人間爭鬪の現實」が眼前に展開された事に舌を卷いたに違ひない。さうした一つの事實から、轉じて大阪の芝居を考へ、若しスタンバーク氏があの「石松」劇を大阪で觀たとする。東京程の感銘は受けなかつたであらう。何故ならば大阪の芝居では、絶對に人間が斬殺されても「鮮血」が出ないのである。大阪の芝居の登場人物悉くは、みんな「血液」を持合さないナンセンスな奇現象に接した事だらう。といふことは決して大阪の俳優諸君に對する皮肉ではない。如何に大阪の俳優諸君が、その殺陣の演技に就て、東京よりも苦心をしてゐる場合の多い事を知つてゐる。しかし、どんなに斬つても突いても「血液」一滴も持合さない。若し彼らの中で勇敢にも一滴半滴の「血液」を用意しやうものなら、「文化の低い地方に於ては惡影響あり」との理由の下に、その「血液」は黑色又は褐色に變更される。スタンバーク氏よ。一度大阪の「劍技」に就て何か物を云つて欲しいものである。都會人、殊に東京等の小市民の神經はガス糸よりも細く出來上つてゐる。鮮血を見たゞけでもゾッとする。さうした傾向はインテリ階級に殊に多い。文化の低い地方に於ては、人間を斬れば血の出る事當り前だといふ常識以外に、血が出るからこれを自己經驗に移して實踐しやうなんて手罩もないだらう。「惡影響なり」とは誰が云ひ出したか知らぬが、大阪の如き文化施設の發達した大都會にも、この暴令が嚴然と控へて、舞臺人間の「血液」を枯渇させてゐるから、その暴令自體こそ「非文化的」といはざるを得ない。吾等は何とかして「大阪の俳優」と「取上げられた血液」を取戻してやりたいと願つてゐる。さうでないとスタンバーク氏に聞かせて面目ない話になる。

世間樣はトラブルがお好きと見えて、何かあると松竹と東寶を喧嘩させやうとする傾向が、最近著しくなつた。甚だ面白いことでもあり、でもない劇界現象だ。福助が東寶入りをしたとか、鴈之助がするとかいふ噂が立つと、すぐ何處かの「歌舞伎王の座が搖ぐ」とやつゝける。今更に福助鴈之助が「歌舞伎の王座」を占めてゐた事實を玄人である筈の吾輩は敎へてもらつた。有難い世間である。その王座俳優は折角占めた大阪の王座を振捨てゝ東京の何處かの畑へ移植される。彼らとて名譽心とか向上心があるなら、今更「王座」の箔をつけられた大阪を去るに一抹の感傷があるだらうといふもんだ。福助の如き中村梅玉の後繼者として前途囑目され、古典座といふ若手歌舞伎を主宰する春秋に富む俳優である。大阪に生れ、大阪に育ち、漸やく「これから」といふ所で東京へ行く。別に彼が東寶へ走らうが、松竹にゐやうが、さうした事は問題ではない。今日の福助を作り上げた「大阪」を忘却するなといひたいのである。殊に東京人は鄕土的に身ビイキの多い所である。大阪の俳優と東京出身の俳優に對する關心を平等に持つてくれるならば、別に心配はないが、上京した福助に嚴正な批判を向け、折角奔放に育つた彼の天性の芽を摘まゝれては氣の毒だと思ふ。彼を育てゝくれた大阪人なら、飽迄も彼が完成される迄、樂しんで待つであらうが東京では餘程の覺悟と精進が必要ではないだらうかと思ふ。と同時に、鴈治郎沒後、さなきだに不振の噂におびやかされてゐる大阪だその逆境にある劇界を見捨てゝ行く心臟の强さが、彼の將來にどんなに響くかも考へて善處することが、彼自身の生きる道だ。

辻野良一が藝術的な煩悶から一女性を同伴に情死を計つて未遂に終つたといふ話題は、八月劇壇に少し耳新しいニュースであつた。座頭俳優が情死を計つたなんて、前代未聞でもあつたし、それに劍劇俳優といふだけにその大衆性はトビック・バリウともなつたやうだ。しかしこの一情死事件は辻野個人としてはまことに氣の毒でもあるし、眞に藝術的良心の發露とするならいかんとも仕難い事ではあるが、彼が座頭といふ一劇團の統卒的立場の社會性を考へる時には、餘りにそのエゴイスチックな行動が、或ひは彼の再起に如何に反映して來るかと案じられる。彼一個の沒落に依る一劇團の生活は當然此處に停止される運命に逢着し、團員は四分五裂の憂目、彼の劇團の爲めに投資を惜まなかつた興行資本家は莫大な損失を蒙むるといふ結果になる。いやになつたであらうと想像される。然らば彼の如き立場の人物は、いかに苦しい事情があらうとも輕々にして自己淸算の出來ない運命的な責任があるのである。秋の聲に近い道頓堀の眞晝時、汗と垢によごれたカッター・シャツに、これも薄よごれた夏服を着ながら、茶色の冬帽をかぶつた一見うらぶれた感じの青年と筆者は出會つた。彼は辻野一座の文藝部員である。「どうしてゐる」と聞けば「あの事件以來ルンペンだ」と答へて、どうにもならないこの浮世を嘆じるかのやうに「藝術の惱みで女と死れる人間は幸福だ、そのために食へなくなつた座員の慘めさを考へてやつて欲しい」と微苦笑を洩らして去つた。深刻な人生點描ではないか。最初辻野の死に同情した筆者は、その文藝部の一青年の姿によつて一つの冷たい社會批判を敎へられた。一人の悲劇が何十人の悲劇の導火線となり發展したことを考へると、辻野も氣の毒だが、劇團員の分裂にも一掬の同情を禁じ得ないのである。

伊勢音頭上演に際して

片岡我當

九月に東西と別れて私と林君が同時に伊勢音頭を出すのは一寸面白いではありませんか。

この伊勢音頭も貢をする人の仕勝手でいろ〳〵の演出法がありますが林君は勿論お父さんの型を踏襲されるでせう。私も今度はだいたい父の型で演じる心です。道具も父の創案通り油屋は店先から奥座敷、再び店。それから奥庭と云ふ事に致しました。東京では斷然一杯道具でやる事になつてゐますが、宗十郎さんと河内家さんは私の父の型で三杯道具でやられたそうです。

今度は東京各地の藝者衆が音頭を踊りに出るため拵へのかゝつてゐる奥庭ですが父のは拵へなしの庭の道具でした。

たしか油やだけで一時間半かゝるのが普通ですが今度は川尻先生の改訂で一時間十分位で出來るようになる筈です。

私が最後に父の貢を見たのは東海道巡業の時で、お紺が宗十郎さん喜助が亡なつた宗之助さん。萬野が歌六さん等でした。今度は貢が私。お紺が宗十郎さんの御子息の松莚さん。親と親、子は子とこれも一寸面白い因縁ではありませんか。

時日があり、お互ひに二三日の休力をゆるされるなら林君と私とで貢座談會でもやりたかつたと思ひます。

私は林君の貢の好評を祈り。林君も亦私の貢の成功を祈つてゐてくれる事でせう。

結核ニハ オキタワリン

淋病ニハ コナイン

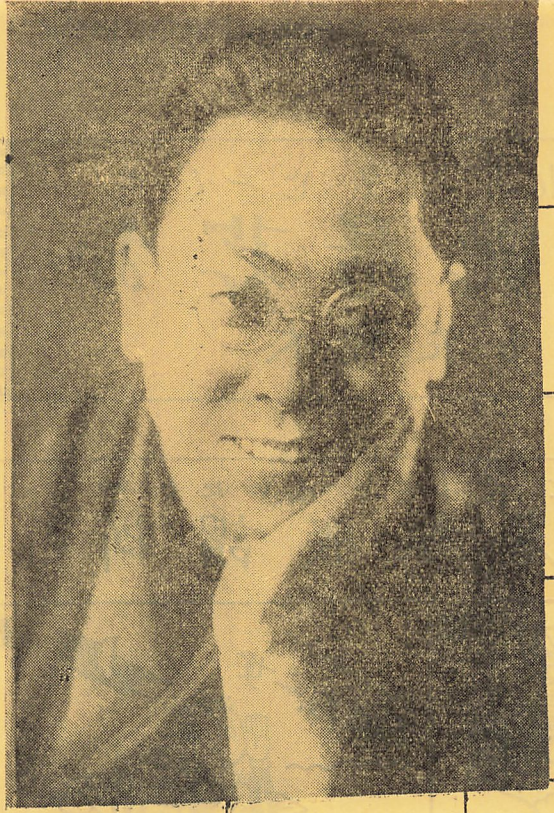
…花柳病科…

藤原医院

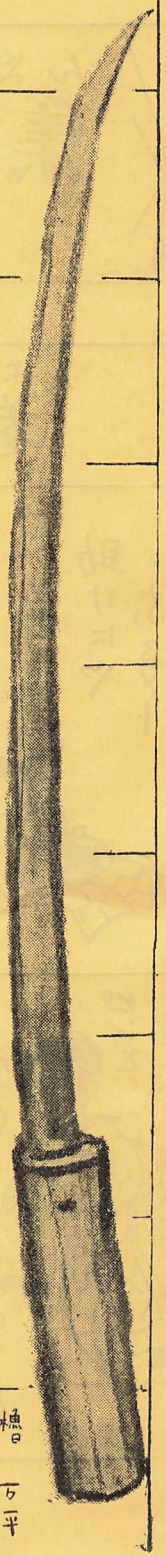
★ 戎橋筋溝ノ側西入 ★ 電話戎二六三六番 ★

淋病ニハ コナイン

結核ニハ オキタワリン



ドウトン・リボルセクション



槍 一万平

んよしくれさろ名じーてき

集物艶居芝お

つもた槻大

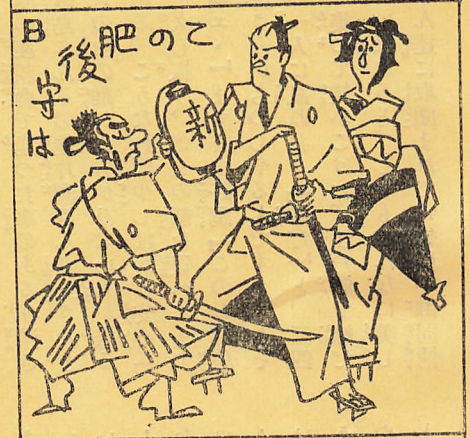
んよしくせんもたよふいにくぞ

巻の者旅服謂所

ノモラバンヤチ
巻の軟飯

A

B



C

んはといとうとんで
物語世

東西松竹楽屋話

千塚栄

◆またくる日への思出に

★全くもつてお氣の毒みたいな話なのであるがTSSKに關する限り、ボクの知識たるや頗る貧にして弱なのである、ホンノこの間までは自信をもつてあれは誰だと云へるのはターキーとオリエだけだつたのである、それでもこの頃は漸くにして、あの唄手は江戸川女史であの三枚目は草香のたつちやん、あのおばちやんは春野ヤスベエに吉川のお秀さん、あのアンヨのきれいなのはベストドレツサーとして有名な天草シヤコ女史、その他熱海クンに川路のマメさんと十人餘り自信をもつてお名指しの出來る樣になつたのである。これだけの賴りなさで樂屋へ出入するのであるから全くもつて勉強しないで試驗場に入る樣な心臓の強さであるそれでも落第などといふ憂目はないのであるから安心なもんである。奈落を通つて階段を登るとリオグランでの幕切れに近い興奮がスピーカーから樂屋一ぱいに擴つてゐる、美しい踊子たちがエレヴエーターで上つたり下つたり、ボクの心臓だつてチヨツトばかし血を躍らせて居るらしい狀態、エイヤヽヨと飛び込んだお部屋、自信をもつて言へないが、一度少女雜誌の座談會で逢つた事のある伊澤さんに歌島さんその他片瀨さん歌上さんとこれらの中の誰かにちがひない人が居るのである。こうなれば少しばかり安心『やあ、久し振り、ボクの顏を覺へてますか』『エヽ』ますます好調『このお部屋に伊澤さんいらつしやるんですネ』とその中の一人に訊ねたら『嫌だ』と、三四人寄り集つて笑ひこけた。江戸辯で嫌だなんていはれると、しかもこんなに美しい娘さん達に取圍まれて、皆樣、御同情を願へませんか、ボク完全にテレちやいました。何と面と向つて訊ねたんが、當の伊澤蘭子さんなのであります。餘り好調、好調とばかしに知つたか振りをしたのがいけなかつたのです。こうなれば大いに心臓を強くすべきです、江戸辯なんて使つてる場合ぢやありません。『大阪どないだす』『隨分涼しいのネ』『當りまへだんが、コヽは冷房やし、あんたの向ひはアイスキヤンデーの製造所やが』（皆樣御存知ですか歌舞伎座の西隣りにあるのを）『嫌だ』（ヤーダと發音しないと氣分が出ません）餘りハヂをかゝない中にお部屋を飛出す。オヽ神樣、なんといふチヤンス、ターキー先生がズボンを入てらつしやる、よき眺めと早速スケツチに及ぶと『お召しかへ中だから、覗くんぢやないわヨ』鶴の一聲、鶴にしては少し太つてますが、この女史、音に聞えたターキー先生の女房役石上のカンちやんでありました。オヽ神樣よではありませんか。

★東京松竹に比べて、こちらの方は少々自信があるのである。舌足らずの江戸辯を使はなくとも、結構話が通じるだけでも心丈夫である、ガラス戸のそとから覗くとスター室、アーサア美鈴さんと笠置シズ子さんが寢そべつて、その側に秋月惠美子さんがオカキを喰べてゐる、察する處秋月さんがお姉さん達のお部屋にオカキを喰べに來て居るらしき風景です。『今晩は』『お入り』『ヤア、コンバンワ、あんたこないだウチゲーリーグランド好きやと書いてはりましたナ、本當はクラークゲーブルだんねデ』早速ボクがある本に書いたアーサアファン心得帳の訂正抗議です、ゴヒイキなどといふものは實に神經質なものらしいです、ヒガンでゐるわけではないですが、ゲーリ・グランドとクラークゲーブルの相違で早やかくの如きであります。あゝボクもクラークゲーブルの如くオとゲがはやしたいです『處で排水溝の殺人事件はどないだす』『あゝそれやつたらもう言わんとくんなはれ　ＯＳＳＫ始つて以來の大そうどうで大隅さんなんがあの日熱だしはりましてんで』と笠置女史『靜浪さん言ふたらな口押へてからにゲーゲー言ふて胃活のんではりまんね』と秋月さん、全く以て可愛相みたいです、僕もこんな事書くのは止しましよう、何しろこの原稿を書いてる時間が草木も眠る午前二時ですからね、話を一轉してハツピーフエローの樂屋話『ウチ舌が短いわけやないねんけど、ようセリフつまりまんねん、第二景で芦原さんにそんな花ざらにある奴でさと云ふ處、どないしてもザアにあるになつてしまいまんねん』『そうそういつでも美鈴さんそない言やはりまんナ、ウチ可笑しいてからつちやと思ひまんね』何時の間にか芦原千津子さんがあらわれました『可笑しい話いふたらナ、大隅さん何時でも人笑はして自分は濟ましてはりまんね、こないだかて、あの象の出て來る時ナ、舞臺で大阪辯まるだしで、今日の象こわかつたか、いやはりまんネ、ウチ可笑しいてプウとふきだしてまいましてん』これは笠置女史、話に身が入つて來ました、赤いフトンにチンと坐つて『樂屋では、チヨツトもチメタイもん飲まれしまへんねデ、ウチ、麥茶入れて來まつサ』と美鈴さんお手すからサーヴイスされた麥茶をのんでボクいさゝかヨキ心地であります、これはいゝネタがひらへ相やと思つたトタン惜しや開幕三十分前のベルが鳴りました。では、さようなら。

ハツピー、ハツピーフエロー。

妹　脊　平　三

それ、何ごとによらず當世は兎角オリムピックのガンバリばやりにてレコードを破ることをのみ念ずる人々の多きこと。オットセイか人間か見境ひのつかぬ樣なるガンバリ屋がプールの中に三十餘時間の滯水レコードをあげるなど、いやはやその心臓の強さの程、凄まじきものあり。

されば舞臺の上にても一人二役、三役は普通のこと、一人八役三十回早替りにて相勤め申候ナンテ心臓の強きものも現れたり。

家庭劇三人娘 樂屋訪問

宮田　英　三

OSSKのレヴュウ・ランドから思ひもよらぬ松竹家庭劇一座へ引つこ抜かれて、いまは既になくてはならぬ家庭劇三人娘……月丘松子、千種花子、松榮澄子の三孃を……折柄〃とんがらかつちや駄目よ〃で、レヴュウ仕込みのハツラツな舞臺を見せ終つた處で、中座の樂屋へ訪れて見る。

――あんたら、家庭劇へ入つても、ちつとも昔と變らへんな。

月丘――さう、どつちがエ、のんやろ、變るのんか、變らへんのんか？

（中座宣傳係で、無作法な僕のお見附役でもあるM氏が口をはさんで……）

M――そら、變らん方がいゝよ。

千種――なんせ、レヴュウ生活も八年も續けて來たもんな。

松榮――一年や二年では豫らへんわ。

――レヴュウから芝居へ入つてどう？

早替りと申すは、自分の吹替を隨所に現しその隙に寸妙を爭ひて變裝二役三役相勤むるものなることは既に諸兄の御存じのこと。

さるにても、三十餘回の早替りには流石の衣裳方も大汗のふらふらにて三十餘回分の衣裝を順序よく取揃へ取替へることに悲鳴をあげたり。

當人の役者は、若さが物を云ひ心臓は人並すぐれて肥大に恐ろしくも強き方とてマラソンの村社選手の如く奈落を驅けまわりぬ。スツポンより下るときは猿の如く揚幕への猪突ぶりは見るものをして心臓を寒からしめたりとか。

かくして連續晝夜二回十六日興行とせば九百六十餘回の早替りといふ實に物凄きレコードをこそあげぬ。

この評判殊の外よく——とは云へその役々の藝を賞でたるに非ず超人的早替り回數に驚きての拍手なりし。

されば、その役者思へらくこたびは一人にて百回の早替りをなさんものをと考へ作者に注文なし「忠臣藏」を一人にて大序より討入まで演ずることゝはなりぬ。

さて此處にハタと困りしは大詰討入りの場には如何に三面六臂の勇ありとも一人にてはチャンバラはならず。

止むなく姿かたち尤もよく似たるものをワンサ吹替に使ひ一同には自分の聲帶模寫を教へこみ自分の足くせ手くせさては引こみのくせまで教へこみぬ。

松榮——芝居はムツカシイわ。

千種——こつちでは振りつけも自分でせんならし……。

月丘——思ひ入れ……云ふたらムツカシイもんだんなア、うちら、臺辭が途切られたら、何やテレくさうてならんけんど、そこら十吾さんや天外さんはうまいし。

——相手役も男裝の麗人やないから氣分も變るやろ？

月丘——斯う（と、身振して）天外さんに抱かれる時、何やケツクイやわ。

千種、松榮——ほんまにケツタイやなア。

——レヴュウ生活が戀しくない？

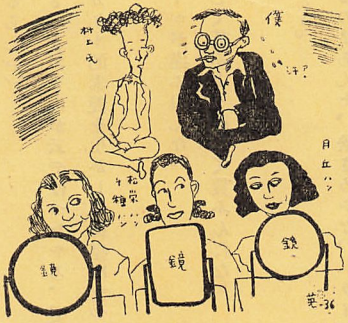
松榮——チツトも芝居の方が張合てがあつていゝわ。

月丘——レヴュウ云ふたら何や、意味ないなア、ピンと來ないわ

——あれ〳〵、急に大人になつたんやな。

千種——芝居の方が生命があるわ。

——まあ、せい〳〵勉強して大女優になつて下さいよ。



吹替といふ役、由來冴へぬ役にて役者の影の如きものなり番附面には名も見えず、しかも如何にもその役者の如く吹替へられる役にてこれ全く魂の無き無遊病者にさも似たり。

さても、さてもオドロクべき心臓の持主なる彼の役者大車輪大猛演にて舞臺に出づると見ればアツト云ふ間に花道へ、揚幕にツト入りたりと見れば上手より、吹替も大熱演大多忙はさること乍ら、よくも心臓の續くものかなと觀客一同肝をひやしぬ。

流石早替りのレコードホルダーも百べん近き早替りには心身遂にへな〳〵となり、何にが何やら無我夢中、ェイツとばかりに斬倒す筈の吹替に、どうした手筈か反對にヤツとばかりに投げ倒され足下にグツと踏まれたり。

違ふ〳〵と下から云へどこは如何に、この吹替キツト「ばかりに正面きつてやあ〳〵吹替とく集れ」と大聲に呼ばわつたり。

と、見ればゾロ〳〵現はし吹替連隊四十七人。

踏みつけられたる本ものゝお役者を取り圍みたり。

『意恨重なる吉良上野今ぞ仇を討晴らさん』と一同にて討かゝりェイ、ェイ、ェイとこそ勝鬨を擧げたり。

トタンにチョンと幕とはなりぬ。

おさまらぬはお役者、事もあらうに吹替奴に舞臺を荒され、あまつさへ遂には踏みつけられたる口惜しさは怒り心頭に發し思はず衣裳をカナグリ捨てたれば、おゝナント衣裳こそは慌てゝ着用せし吹替用のキラの衣裳にこそ。

月丘——そやけど、ファンが變つてチョツと淋しいなア。

松榮——中年の男の人が多ふなつたわ。

——ファンの贈物も變つて來たでせう？

月丘——フン、チョツと減つた。

千種、松榮——月丘はん、阿呆なこと云はんでゝわ。

月丘——なあ、うちら、これからどない勉強したらェゝやろなア？

（と、彼女、氣にかゝるらしい）

——どない…つて？　さつきMさんが云やはつたやろ、變らん方がいゝよ

どこまでも、レヴユウガール的素養を生かして舞臺に立つ、音樂の不調和

音の調和だよ。

月丘——うちら、オクターヴが違ふれんな。

——脚本も三人娘を生かして貰ふようにして貰ふんだな。

松榮——おゝきに。

月丘、千種——おゝきに〳〵。

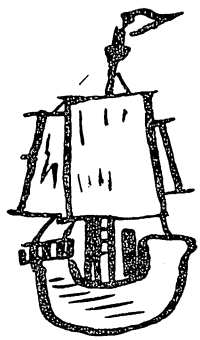
松榮——もう、歸れやはるの？あんた、暑さうやな、ェライ汗かいてはる。

月丘——アイスコーヒーでもおごりまひよか？

——いや、僕はホツト戀の方がいゝですよ。

月丘——まあ心臓の強いの、よう云はんわ。

（心臓が弱いから汗をかいてゐることを彼女たちは知らんらしい）



宮本武藏

大澤休象

宮本武藏は幼名を辨之助、又は「たけざう」と呼ばれたらしい。私は吉川英治氏の宮本武藏を讀んで、古今獨歩の名作と、いつも繰り返へし愛誦してゐる者だが、九月の浪花座で青年歌舞伎に依つて上演されると聞き、嬉しくて堪らない。

此間、大朝の座談會で、武藏の二刀流に就て種々異論があり、はつきり決しなかつた樣であるが、私として全然別な考を持つて居る。併し、夫れは又他の機會に述べる事とし、爰に武藏の用意周到さに關し、聊か卑見を披瀝したいと思ふ。

巖柳島

私は嘗つて妹の良人が仕立てゝ呉れた一艘のランチに乘つて、巖柳島へ行つた事がある。豊前小倉の大主細川忠興に抱へられてゐた佐々木小次郎は、備前長光三尺餘の大刀を帶びて待ち疲れてゐる所へ、遍舟に踞まつて來る武藏の影が見へた。

小次郎は猩々緋の袖無羽織に、染革の立附袴を着し、草鞋を履いてゐるのに、武藏は絹の袷の上に粗末な綿入を被り、舟中で作つて觀世撚をを襷にかけ、短刀を差し、裳を高く褰げ、木刀を提げ素足で船から下り、波打際を渉ること數十歩悠々と帶に挾んだ手拭を取つて一重の鉢卷をしながら近づくと、小次郎は憤然として進み、水際に立つて、己れは早くから來て居るのに、貴公は何故約束の時刻を違えた。怯れたかッ』と云つた。が武藏は聞へぬ振りして默々と來るので小次郎劫然と怒つて、利刄を引き拔き、鞘を海中に投げ入れたのである。

武藏は一寸立ち留つて、小次郎負けたなと云つた。小次郎は若い丈けに赫つとなつて、

「何故己れが負けた？」といふ。と、武藏除さず、勝てば鞘を捨てるに及ぶまいと罵つたから、小次郎は太刀を眞向に振りかざして斫り下したが、同時に打ち出した武藏の木刀が早く小次郎の頭に當つて倒して仕舞つた。

心術の相違である。

之は武藏の常套手段と云つては變だが、吉岡清十郎を仆し、弟の傳七郎を擊殺し、清十郎の子の又七郎と、數十人の門人に對し、只一人、洛の東北、一乘寺藪の郷、下り松の邊り於て果し合ひをする時に、武藏は毎もと異つて、敵より先きに行つて、度膽を拔き、充分の勝利を得た、機に臨み變に應じて智劍を揮ふ所は、禪家の修業から得たのであらふ。

小太夫の武藏は豪宕なる此の優の適役であり、扇雀の澤庵和尙は如何？　相當の工夫を要すると思ふ。成太郎のお通、菊次郎の朱實等粒揃ろひだからきつと面白い芝居を見せるだらう。

（八月二十日）

伊勢古市の大林寺で
お紺、齋の比翼塚に
香を手向ける扇雀と
錦吾の兩優です

伊勢音頭解題

山川聽雨

伊勢音頭の狂言は、寛政八年五月四日(百四十二年前)伊勢古市町油屋清右衛門方で起つた出來事を近松德三が四幕七場に脚色したるものであつて、同八年七月二十五日に角の芝居で上演されたのが初演であつた。

＊

實錄に依ると死傷者は九人であつて、その内譯は左の通りである

即死二人

油屋清右衛門母きさ(五八)

〃　茶汲女きし　(十　七)

負傷七人

油屋茶汲女しか　(不　明)

十村岩次郎　(三十三)

島村孫三郎　(三十五)

浦村伊太郎　(三十一)

油屋下女まん　(二十八)

〃　〃　よし　(四　十)

〃　下男卯吉　(三　十)

また即死になつた二人の慘狀は左の通りである。

○清右衛門母きさ死骸改

一　北向低向に倒れ相果罷在候但處々血流れ有之

一　年五十八歳

一　せい高き方

一　面體丸顔色白き方

一　兩顔口共塞さ居候

一　耳常體鼻筋通り

一　天窓髪之内かすり疵一ヶ所

一　右之腕疵二寸餘骨へかけ腕落かゝり有之

一　乳の下えぐり疵一ヶ所長三寸

餘深一寸五分餘乳落かゝり有之

○茶汲女きし死骸改

一 四向低向に倒れ相果罷在候但處々血のり流れ有之

一 年十七歳

一 小せい

一 面體丸顔色白き方

一 耳常體鼻筋通り

一 首半分斗切れ落かゝり有之

一 天窓髪の内二寸餘深一寸餘の疵一ヶ所

一 左之肩先長四寸深二寸餘の疵一ヶ所

と記錄に見えてゐるが相當慘酷な殺し方をしたものと想像出來る。

次ぎに此の狂言の主人公福岡貢である齋宮とは如何なる人相の男であつたかを記錄で見るに

一 年二十七歳

一 せい五尺二寸位　但中肉

一 顔面長頬　但色白き方柔和に相見え

一 惣髪厚き方

一 眉毛濃く目尻上り二重眼瞼

一 鼻筋通り鼻高き方

一 口小さく齒細に言舌さはやかと云ふから、先づ一通りの好男子と想像してよからう。これが五月六日の夜に藤波五神主の店舗板間廊下にて自害したが、その模樣は

一 臍下腹長七寸餘深一寸五分計疵一ヶ所

一 咽喉長二寸深一寸五分計疵一ヶ所

一 齋宮と呼候得ば答は仕候得共言舌篤不相分服藥爲致候處咽喉疵より漏出申候

と記錄に殘されてゐる。

此の狂言が現今に傳つてゐる代表的な型は享和三年二月の河原崎座で三代目坂東彦三郎が演じたものを三代目尾上菊五郎が繼承し、更に五代目尾上菊五郎に至つて大成した所謂音羽屋型で、明治三十四年八月に歌舞伎座で演じた折の衣裳は次の通りであつた。

鬘は本多髷の鉢前鬘、殺し場は壞れて一彈け、着附は旅宿より二見浦まで黑地黄八丈の竪縞、花色絹の裏、藍鼠縮緬の丸褞袢、黑八丈の襟、帶は黑八丈(挾み帶)、茶丸打紐の上締、紺足袋、淺裏草履、唐扇を持つ。油屋の場は越後上布の白絣、殺しは同品の替着黑縮緬の單羽織、杏葉菊の五ツ紋、紐は藍鼠の丸打、御納戸献上の博多帶、白麻の丸褞袢、襟は水淺黄の麻、雪駄は八幡黑の鼻緒。

僕等は此の狂言ては間の山ぶしや伊勢音頭を聞かせたり、或ひは二見ヶ浦の日の出を見せたりして、ローカルカラーを横溢させる鄕土趣味を大いに滿喫すべきであらう。

✶

觀て來た鮮滿を語る

第一話

栗島狹衣

鮮滿から歸つて來た若い人達は一番先きへ、あこがれの銀ブラをやつたもんだ。

『どうだね、銀ブラの感想は？』

斯うした問ひに對して、彼等が皆口をそろへて答へた言葉が面白い。

『イヤどうも內地は問題になりませんよ。鼻がつかへて仕樣がありませんや。銀座なんざァ魅力がなくなりましたぜ』。

いかに若い人達の氣持が、大陸的な、創造的な、鮮滿地方の風物に動かされたかお解りになるであらう。朝鮮はともかくも、滿洲に入つては、全く雄大なものに壓倒された事は一言も無い話である

朝鮮では京城の整備した外觀が、流石に大都會といふ觀念を植付けた外、其他の土地ではニンニク臭い嫌忌を感じさせたのみで、さして昂奮するやうな事物に遭遇しなかつたけれど、それでも吾々の取つたコースが、幸に北漢地方へ折れ込んだ爲め却て一種の異國情緒に浸つたのは愉快な事實であつたといへやう。

興南、咸興といふ荒削りの新開地に、大規模な窒素肥料會社の動きを觀て、こゝの大機關が軍事的に活動する日を思ふと、吾等日本人の護る國防線上に、どれ程の力强さを感じた事であらうか。

羅南へ行つて、兵隊屋敷のおごそかな有樣を見た時に、ふいと金語樓君の兵隊を想ひ出したのも滑稽だつた。あの人の話に

のみ紹介されてゐた羅南を、現在の眼の前に据えて見ると、あのトボケタ人の、ナンセンスな詞には味があつて、羅南で靴をみがいた金語樓君の幸福を祝福せざるを得ないのである。よくこそ、日本人と生れて羅南の兵舎へ入營したといふ事の、平凡ならざりしを思ふからである。ソウ思ふ事程左樣に、私達はミリタリズムに謳歌せざるを得なかつたのである。

鮮地では金剛山の雄大なことよりも、私は半島風俗の幽雅なものに感動した。牛を售る市に、悠然と髯をシゴク老翁もよし瓶を頭に乘せて行く少女もよしで、これらは充分に繪になり詩になる事と思つた。

敢て妓生を招かずとも、アリランの唄は、巷の其處此處にころがつてゐる。

併し鮮地では、若い人達の心はときめくまい。矢張り滿洲へ足を入れなくてはダメであつた。

豆滿江を一つ渡つて、間島省の圖們へつくと、すつかり舞臺裝置が變つて、初めて創造的な空氣に目を睜つたものである。

密輸入者を見張る哨舍と、匪賊襲來に備へる鐵條網と、先づコウした異變的な第一印象が、私達を緊張させたのであつた。

圖們は匪賊のスパイと、密輸入者の群とが、日に何人となく捕まつて行く町である。茫々たる草原の中に、建てすてられた赤煉瓦の空家が、紅々と夕日にてりはえてゐた。

さびしく二三本の幟が立つてゐる外、何の裝飾もない劇場はいやが上に生へた青草の中に、矢張り赤い煉瓦のドギツイ色を流してゐた。夕日が破れたガラス窓に反射して、ギラ〳〵と目をおびやかしてゐる間は、人ッ子ひとり寄りついて來そうも無い。

滿洲小僧の腕白隊が、異樣なドラムを叩きまわツて、宣傳旗をかつぎあるいてゐたが、こんな事で誰が何處から見物に來るものかと思つてゐた。

血のやうな日が沈むと、もう午後の八時になつてゐる。それまでに何處とはなしに、忍びよるやうな吾が同胞の男女――イキなゲイシャガールの一群などが、いつの間にか、劇場の木戸口に殺到してゐる。これで草原の中の灯の家から、花やかなシヤギリが鳴りわたつて、もう大入滿員の札止めが掲示されて仕舞つた。

この荒れ果てたやうな國境の町にも、吾等同胞の偉大な力が潜んでゐたのには、吾ながらほゝゑまれた事であつた。

戰車型の裝甲機關車が前驅すると、ロシヤ風の鐘を鳴らした列車が、北に向つて牡丹江へと軋り出すのである。列車のアトには機關銃隊の武裝兵が十數名、それから各車毎に、警乘兵若

干が乘込んで、警戒をさ〳〵怠りなく進んで行く光景は、決して只事では無い。廟嶺を距る五〇キロの點で、おそろしい山崩れがあつて、こゝが徒歩連絡といふことになつてゐた。鐵路に沿ふた灌木の間を十數丁辿るのであつたが、午前十時頃の太陽は、浮き立つ雲にかくされて、小雨がシト〳〵と降つて來た。護衛の日本兵士と滿洲國兵士、警備隊士、鐵道附屬警備員、いづれも武裝いかめしく乘客を護つて、この徒歩連絡線を完全につないでくれた、あとで聞けば、こゝは一番匪賊の出沒するところで、此徒歩連絡には、警備の軍隊も餘程頭をなやましたといふ事であつた。

牡丹江へ着くのが夜の九時であつたが、此列車の中で、共匪のスパイ八人といふ者が捕へられた。匪賊を別けて三つになるソウだが、その中でも統制的な奴は、共產黨の匪賊で、スパイの中にはインテリな男女が多いことである。立派な服裝をして堂々と芝居の見物にもやつて來る。此奴には油斷は出來ないとの話である。

去年の六月頃に、京圖線（新京と圖捫との線）の淳化へ現はれた大部隊の共匪は、その頃渡滿してゐた〇〇レビュウ團をねらつて、その中から金目な者を拉致しやうと企てたが、それが鐵道破壞を美事にやつて、吾々の同胞及び軍隊を全滅させた時幸に期日におくれて乘込まなかつた〇〇レビュウ團は、危機から脫出することを得たといふ話である。こんな話をきかされると、私達の肝も冷え返るやうであつた。

殊にいつもよりは多數のスパイが列車中で捕へられたので、それとなく警戒を與へてくれた好意に對しても、私達は愼重の態度を取つて、萬全を期せねばならぬと思つた。それで牡丹江へついた上は、私達一座員——殊に女の多い私達の一座は、一同相互に警護し合つて、一人歩きを嚴禁することに極めたのである。マアお蔭で無事に牡丹江を乘り切つて、吉林へ赴いた時は、全くホツとしたのであつた。勿論警備は嚴重になつてゐるし、討伐の行き屆いてゐることは申す迄もないが、萬一——といふ場合を考へねば、私達を護つて下さる方々に相濟まぬ事になるから、用心は臆病にしたのは當然なことだと信じてゐる。吉林へ行つた日は、雨のぎア——ツと降る朝であつた。ドラを叩いて行く靈柩車を、滿洲のチンドン屋と間違へた滑稽もあつたが、そんなゆとりの出たのも、實際のところ、私達の氣持の緩んだ證據であつた。吉林はなつかしい舊都の趣きがあつて、忘れがたい風物に接したのである。

深更に雨もやんで、月もおぼろに雲を出た時、かすかに聞えて來た唄の聲は、いはゞ遊心をそゝる投節の一曲ともいへやう

哀調切々たるものがあつて、私は思はず旅館の窓を押したのであつた。而も何れの家より音のふものか、朗々たる明笛の聲は正に一脈の鄕愁を誘ふものであつた。

新京へ來てからは、誰も彼も朗らかな大陸氣分に胸をおどらせて、これからどれ丈け宏壯な町になるか、底の知れない文化の潛在力を認めた時、滿洲謳歌の叫びを自他共にあげたのであつた。若い人達の憧れも、正しく新京にあつたものと信ぜられる。

ガラ札の一圓で、千金を獲得する競馬もあれば、彩票で萬金を夢見る世界もある。併しそんな投機的なことでなくとも、何といふことなしに、私達の胸をおどらせる希望の光が、こゝには明かに輝いてゐるのを感じた。

奉天に來ては、もうそれが既定的なものになつて、もう一度張作霖の眞似をしてみやうとも思はなかつた。只滿洲事變の勃發地である北大營の兵營の跡を見て、改めて吾が皇軍の爲めに深甚なる敬虔の念を重ね得たのであつた。

『茫々と兵舍破れて草靑し』

の感慨は、何人にも感じ得た旋律であつたらう。大連に至つては別に何事も感じ得られず、只繁昌盛大な印象のみに盡きるのである。勿論此處を滿洲色に見るのは間違てゐる事だと思ふ。

終りにのぞんで特筆したいことは、滿洲の珍魚とする『松花江の雷』である。雷はその顏ナマヅに似て、形態は蛇の鱗をそなへた大魚である。その味はスヽキよりも甘く、肉のシマリ加減えもいはれぬを珍重する。此奴往生際のわるい奴で、料理人泣かせの狂暴ぶりを發揮し、肉の一片になるまで、暴れ騷ぐのである。內地の鯉と對比したら、雲泥の差がある。

こうした生の執着を持つ珍魚に對して、匪賊の往生際は非常に潔いといふのは不思議だといふ說が起つた。匪賊は一たん捕はれて、死に就く場合は、悠々首をさしのべて、其覺悟の狀は健氣だといふ譯であるが、其實彼等の信念をあばくと、彼等は大きな迷信に依て、死を急ぐものである。其理由は『病死するものは蘇らず、刑死を受くれば直ちに蘇る』といふのである。されば早く殺して貰へば、早く生れ代ると信ずればこそ、彼等は早く死たいのである。要するに生に大きな執着を持つが故に、死を見ること歸するが如き觀があるので、決して俎上の鯉魚と同日の談にはならず、矢張り七顚八倒する雷と同根であるのであつた——此說明を滿洲通の某氏にきいた時、これは又珍魚に對する珍說なるかなと、私達は感嘆したのである。

本誌特輯

第二話

市川右團次

センマン

シバヰタビ

昭和十一年六月の十六日神戸出帆の商船うらる丸で座員一同と共に知己の人々に見送られ五色のテープに盡ぬ別れを告げて一路大連に旅立つた、幸ひ海上も平穩、疊に座つてゐる如く、四日の海路も大元氣で十九日、一時間遲れて滿洲時間の正午過ぎ本船は大連灣頭に這入つた。埠頭出迎の人々は旗ハンカチをやたらに振つて下さる。ランチに引かれる本船は刻一刻と埠頭に近付いた、そして出迎の人達が手に取る樣に見え出す。乘客は殆んど上甲板に集る。上陸に先立ち新聞社の來訪を受けレンズの中に立ち愈々上陸第一歩です。

やがて遼東ホテルの一室に落付く、丁度私は十五年以前市川市藏氏と一座で大連劇場柿茸落興行に招かれ奉天京城を巡業したことがあつたが其時は十一、十二月の極寒時、先づ私の滿洲入第一の感想として極寒の滿洲大暑の滿洲の比較であります。以前の滿洲入は冬枯の山野が寒氣に襲はれ、町々凡てがたゞ物淋しかつたとの記憶があるがこの度は以前にひきかへ山は靑葉海邊の白砂、そして大厦高樓の立並ぶ街々を羅の袖を風になびかせつゝそゞろ歩きの私たちは實に東洋の誇り國際港の大連異鄕にてたゞなんとなく聖恩の難有さを感じるの外はありませんでした。翌二十日よりは愈々本職の大連劇場初日幸ひにも同胞方々の御同情により五日間大入滿員。

翌日よりは愈々奥地へ入込む事とて急行列車鳩に乘込みました是又列車及びホームの整然とした有樣、乘車口には一々靴拭の置きたるなどは到底內地では見られぬ有樣。次は製鋼所のある鞍山です。町はあまり廣くないのですが整然さには驚かされました。然し私等の到着二日程以前製鋼所の近所へ匪賊の襲來があつて同地の警察官の手に逮捕頭目等は晒首にされたとの話を宿で聞かされた時は思はず衿元へ水を浴びた樣に感じた。私等は無事當地は一日で翌日は奉天に出た。

何分以前の頃は極寒の折柄外出もせず宿に籠つて居たので他の事には餘り記憶がない。幸ひこの度はぜひ見物をと思ひ立ち赤毛布にて遊覽バスのお客となり大變な町の埃に惱まされ驛前にスタートを切つた。さすが滿洲の奉天驛前の宏大にして高樓の建並ぶ狀は只驚くの外はなく案内嬢の説明を聞きながら奉天神社に着く、一同下車禮拜を濟ませ、次は日露役以來の精靈を祭る忠靈塔に一同最敬禮。

それから昔起重貴と云ふ人の創意にかかる同善堂と云へる財團法人の救世園に到る。この園の内容は孤兒院養老院等を合せた組織で、中にも珍らしい事には捨兒をする場所があつて、少さい穴に救生門と記しある等は他國では見られぬもので、又拾はれた兒が靜かに眠るさま等は憐れと見るより外なしだ。

私等はそれより滿洲國創立當時は蓋將軍の異名あつて、さきに反將として倒れた湯玉麟の宏大なる屋敷跡に着く。

この邸宅は今博物館となつてゐ、熱河龍宮に有つた美術品の數々が陳列されてゐて凡てが昔の榮華を物語るのである。是から城内の繁華街を縫ふて一路北陵に向け車は走る。途中張學良の別邸が今は軍用犬の訓練所とかに使用されて居るときゝ盛衰の憐さが感ぜられた。樹木の少い滿洲の地にも此邊ばかりは松樹うつそうとしてその線の丘の中、清朝の太宗文皇帝が靜に眠られて在はすのである。周圍を廻る建物の結構さ殊に翡翠の板石等は昔往の豪華を物語るもの、最後に滿洲事變發生の地北大營に着、地下に眠れる英靈に感謝をさゝげ涙を覺えた。

かくて驛に引返し奉天巡遊の一日を終り、當地も二日間にして新京に乘込む。當地では大阪の青木月斗先生や俳句同人の方々の出迎へを受け漸次俳談を交へ、早々自動車にて忠靈塔に詣で關東軍司令部城内等を廻り、最後に滿洲國皇帝の宮城を遙拜全市凡ては展け行くものゝ潑剌さである。當地も二日間劇場は公會堂滿員の盛況だつた。

同地を出立し吉林へゆく。滿洲の水鄉松花江上流地では、幸ひにも植田關東軍司令官の御巡察に逢ひ拜觀をする。折惡しく、折から雨がはげしく降出し閣下を出迎への學童青年團等の方々はびしよ濡だ。だが一同は起立である。その中を先づ先頭に大日章旗を立てたオートバイ、續いて獨立守備隊の兵士と機關銃をのせたトラック、後から軍司令官の颯爽たる車上姿、後は數臺自動車が通つて以前の如きトラックが續々、かく異鄉にて威風堂々たる皇軍の樣を拜せば心强さ限りなく、殊にこの夜は司令官閣下と同じ宿にて心安き一夜を過した。尤もこの吉林線に這入れば各驛には警備の兵士達が居られ車中へは鐵兜の守備隊の方々七八人も

隊を組んで乘込んで來られるので何やら物々しい氣分がするが……。

私達は飛脚の旅だ、明くれば東洋が誇る撫順炭鑛へ行くのである。時間の都合がよいので、新京から奉天まで超特急亞細亞に乘つた。これが又世界にて二番目とかの車輛で、時速百三十粁車內の優美實に想像以上の列車である。奉天で乘替へ撫順に着く。

こゝでちよつと話は後先になるが吉林での事急拵への舞臺花道を造つたため私は中幕に實盛を演つて居たが馬上で幕外に幕が閉り花道を向いて這入つたが馬が這入る事が出來ず花道で馬をすわらせて降りたと云ふ滑稽も演じた。當撫順にて宿よりの勸めに炭礦見物をした。例の露天掘など私共にはわからぬながらも雄大さには驚かされた。當地も二日間で奉天まで引返し安奉線に這入る。安奉線とは奉天と安東をつなぐ鐵道でこの地方一體が非常な山岳地帶で近頃大變匪賊の襲來が多いと云ふ話を聞かされて居る爲何やら無氣味な心持だ尤も滿洲の鐵道には乘警と記した赤い腕章を付けた警官が乘合されるので決して心配はない筈ながら揃ひも揃ふて私等の連中はビクビク物でちようど安奉線の中間本溪湖と云所に來た此所も伸銅所のある所で町には自動車もなく馬車が一臺に人力車五六臺と云ふ交通機關、私等の宿は驛前ながら後は山、前も又鐵道をへだてゝ山、その山々には全部鐵條網が張られ、夕方からは電流を通すとか、又この町は最近襲はれた事が有つて兩三日以前は二三の驛が襲はれ驛員が皆殺しに逢ふたといふ話を聞きまさに心膽の高ぶる思ひだ。私は一晩こゝで泊つたが他の人達は時間の都合上夜行で安東まで行く事になつたので口々に不安がり騷然さは實に想像以上でした。私もその時間に驛まで見送りかたがた見に行きましたが到着の列車は全部カーテンをドゲ外からは一切火氣の見えない樣にして乘警守備隊の兵士達が十人程も右往左往して居られたのには私も少々心持のよくない感じがした。私も翌日は滿洲の最終安東に來た。鴨綠江——安東滿鮮國境の安東縣だ。

新京出演中一座の人々と衛戍病院に傷病將士の方々をお尋に參り院長閣下にお目にかゝり先づ重傷の方々は各病室を訪れお慰めの御挨拶を申上げ又終りに講堂にお集りになりし方々の爲急拵への舞臺テーブルを澤山並べた上で、私初め皆々思々の餘興を致しお目にかけたが、院長閣下よりは御叮寧なる感謝狀を頂戴致した。かく澤山の同胞の方々奧地の炎天下に御精勵被遊るゝ有樣等承りたゞ涙を以て感謝申上げるより外はない。

貴い同胞の同命的努力によつて滿洲國の治安平定も目睫の問題であらう。

演劇飛行便

東京

爽快な秋の訪れ、絶好の芝居シーズンだ。

【歌舞伎】座は一日初日の四時開演で、猿之助訥子に男女藏梅玉等といふ一軍の强者がどつかと腰を据えてゐる。第一「運雜船」に、大阪文樂座義太夫若手特別出演の所作「壽式三番叟」中幕「戀女房染手綱」二番目「續森の石松道中記」

【明治座】新派大合同正に初秋の豪華陣である。毎夕四時半開演で第一「二十六號隧道」第二「人生の日かげ」第三「誓」第四「織の白瀧」

【新宿第一劇場】我當、福助に、高助、鶴之助に松莚、勘彌その他潑溂たる顏觸れで、二日初日、毎日四時開演。一番目「浪人倶樂部」中幕「牛盜人」に大阪浪花座九月の若手歌舞伎にも出てゐる「色彩間苅豆」「伊勢音頭戀寢刄」が上演される、名古屋あたりの人は飛行便に乘つて見に行きたさうだ。

【東京劇場】井上、山口、村田(正)に梅島、伊井それからこゝは女護ヶ島か、八重子をはじめ絢爛たりだ。

——かくて豊富な便りをつみ、演劇飛行は一路西へ——

京都

鴨の河原の夕涼、そゞろ秋風に涼みもならず舞妓はん連れた粹客が、

「さア南座へ行こ行こ……」

大阪

は各座足並みを揃へて堂々行進である。

【歌舞伎座】は澤正迫善の新國劇。

【浪花座】は扇雀、成太郎、鴈之助、我久之助、九團次、要、市弁、珏藏、秀郎に菊次郎、竹之助、錦吾謹也、小太夫で毎日四時開演。エライ鼻息で「宮本武藏」「色彩間苅豆」「生きてゐる小平次」「伊勢音頭戀寢刄」を上場してゐる。

【中座】道頓堀の常勝軍、松莚劇の續演である。

【角座】關西新派も今月からは一回興行だ。熱演を以つて鳴る一座の志氣いよ〳〵たかしか……。

神戸

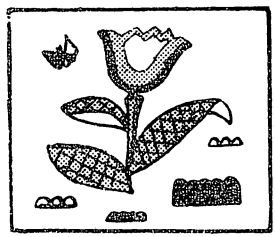
の松竹劇場は一日初日で延若、壽三郎その他の大童の奮闘ぞ目覺ましい。夏の暑さの來たのが遲かつたせいかなか〳〵秋が來さうでない。しかし芝居はすつかり秋の裝ほいなつてゐる。

名女優

戀愛

放談帖

紅文山人



モソ子の子

チイ坊暑いね！暑かネーよ、戀はしてねーからよ、ウフフと竹久千惠子氏はジャラ〳〵聲で笑つた。

恐はい顏して何みてんのさ、氣持の惡い人だネ！　この人……鏡の中の顏はニヤ〳〵と笑つて居る。

雪國の女は肌が美しいとは聞いてたが全くワンダフルだよ。實際恥かしい話だが私は恍惚として居たのである。

そんな甘口には乘らないよ、でも萬更惡い氣持もしないんだから、「ミゾレ」でもおごつて上げやうよ、モソ子チヤン「ミゾレ四チヨ」と側に坐つて衣裳直しをして居る肥つた母親に呼びかけた。人のいゝ母親は金緣眼鏡の奥から柔和な眼射で、口の惡い人と云ひながらモソ〳〵と部屋を出て行つた。

母親をモソ子など呼ぶとはけしからんね、と詰問すると、モソ〳〵するからさと千惠子氏は笑つた。

大阪の想ひ出は？　と訊けば、赤新聞にやられたわね、舞臺の出に一寸遲れたのを、生理的理由だ等と人の秘密を特種にしたのだけれど實際はあの記事後二日目から初まつたのだからセオッテるはね！　も一つは松田某の恐迫狀、會つてみたら押しの強い割に氣の弱い男で、ルン

ペン女優をしぼらうなんて、私しこの頃ウンチも出ないのよ、と云ふと放々の態で歸つたのは面白かつたわね。

時に戀愛なんて舞臺生活者で眞面目に考へる暇があるか知ら！　私は戀愛至上主義者ではないから、安定した生活を土臺に戀愛がしてみたいと思ふんだけれど隨分虫がよささうね、いゝ男はもう見飽いたし、若い男はたよりないし、結局心のいゝ人と苦勞がしてみたいね。でも貧乏だけはお斷りよ、と特に貧乏に力を入れて云ふ。餘程貧乏した經驗があるやうだが、貧乏の味つてそんなに苦しいですか？　と訊けば、秋田の山に育つた女だもの貧乏位は知つてるわよ。貴方が金持だつたらね　……ホホツほんとうですか！　あゝ不幸にして私は貧乏である……フフーツと私が溜息を吐き出すと、止しなさいよ、みつともない、男が溜息吐いたりして、でも岡田さんなんか幸福者ね　……と云つて千惠子氏は同席の岡田嘉子氏をかへりみた。

岡田嘉子の巻

セツセと御化粧をつけて居た岡田嘉子氏がさうでもないのよ、幸福だつたのはほんの一寸の間だけ。この頃はとても淋しいのよ、としんみり云ふ。彼氏にベットでも出來たんぢやない？　と訊けば、そんな問題ぢやないのよ。私達の間が段々冷たくなつて來るやうな氣がするのよ。そんなに意識的ぢやないけれど、第一子供がないと云ふことが、その大きな原因だと思ふわ。

大江美智子

さうぢやないでせう。子供のないことに貴嬢が不安を感じて居ることが一種の冷い感情を醸成するんぢやないですか？子供の産れないと云ふことが彼氏に取つては一つの不満ではあるかも知れないがそれが爲に愛情が薄らぐとは思はれませんね。不満と云ふことが感情を冷たくするのだと思ひますわ、と嘉子氏は云ふ。

私の不安な淋しい理由はも一つあるのよ、私達は血縁と闘つて戀愛結婚をしたのでせう。だからお互ひに味方はないのよ、もしお互ひの感情が冷たくなつた時は破綻の憂目に逢ふのは當然ですし、破綻を縫ひつくらう仲人はなし、不平苦悩を打明ける味方もないでせう。

こゝに戀愛結婚の淋しさ、悲しさがあ然し女の弱點を知れば知る程愛情を向けるのが眞の愛ではないでせうか？私が反駁すると、でも、實際の場合はさう理論通りに行くものではないのよと彼女は應答した。

るのです。でも身を犠牲にして一生悲しむよりは増ですわ、たとひ、破綻が來ても、短い幸福にしても、その想ひ出は殘りますものね、私等矢ツ張り戀愛至上主義の方ね、と愛大ピンクを膝の上に抱へ上げて頭を撫でながら、嘉子氏は淋しさを誇らしげに語つて居ると、

まあ……暑いわね……と夏川靜江氏が岡田嘉子氏を尋ねて這入つて來た。

夏川は失戀型

暑い時に暑い質問も銷夏法の一つ、夏川さんは、戀愛至上主義結婚ですか？それとも媒酌結婚ですか？　私は至上主義までは行かないでもいゝわ、普通の戀愛結婚で澤山だわ、結局私達の職業に理解ある人を撰ぶことが肝心ですもの、でも戀人が職業に理解ない場合は？　結果は解つて居ますもの、深入りしない前に

失戀することに決めて居るの！　すると夏川さんは失戀型つて譯ですね、と笑へば、戀愛と結婚とは經驗してみないことには、その幸、不幸は斷言出來ないと思ひますわ、と云つて彼女は話題を轉じてしまつた。結局彼女は戀愛に於ても經驗論者であることを悟る。

特急燕は半日で私を大阪へ送つて呉れた。暑いことには變りないが、東京人に比べて何處となく垢抜けしてないのが殘念である。だが働くにしても、遊ぶにしても面白いのは大阪である。

女流劍士大江のこと

トンボリを歩いて居ると、何時とはなしに角座の前で足がピタリと止つてしまつた。麗人の男裝夏尙寒き大江美智子の大殺陣のタレ幕が妙に私の心を惹いたからである。（時あたかも八月でした）

樂屋へ行くと、間もなく麗人は男裝姿のまゝ玉散る汗を拂ひながら暑いね……と云つて這入つて來た。御苦勞さん、と云ふとフツと彼女は笑つた。ズラを取つて化粧をはづした大江の顏は全く勞れ切つて居る。痩せたね、と云ふと、苦勞しますものね……何の苦勞ですか？　戀の？　とすかさず切り込むと、

まあ……と大きな眼をパチクリさせながら大げさな身振りで辯解した。

色々とうるさいことが起つて來ますもの普通一通りの氣苦勞ぢやありませんわ。今度の舞臺でも倒れたのですが、樂屋で注射が濟むと唸りながら出なければならないでせう私の場合代役が利かないので困りますわ

それに女だてらに一座を脊負つて居ると泣き度いこともありますし、痩せるの無理ないでせう　……と云はれてみると、私も少々氣の毒になつて來た。

戀などして朗かになつたら如何です？

オリエ・津阪

してみたいと考へる暇がありませんわ、それにこんなお婆アチャンと戀をしてみたい等思ふ物好きな勇士はないでせう！でも時々フツト通り魔式に淋しさが湧くこともありますわ、すると無邪氣な寶塚時代が想ひ出されて一寸泪ぐましい氣持に襲はれるのよ、過去の追憶つていゝものね……勿論にがい經驗でも美しく甦み返へるものですよ、

と私は相鎚を打た。

彼女はこの頃結婚と戀愛は別々に考へるやうになつた。其處に悲劇も起り、人間生活の妙諦があるのだと云つて、冷いものを私に用意しながら舞臺へ出て行た。

彼女の餘技は彩管に親しむことだが、時折色紙などに揮毫を依頼されると實に堂に入つた畫をものして依頼者を恐縮させて居る。

ボヤカれたターキー

タ ー キ ー ● 水 の 江

心齋橋を通ると女の子の口の端から洩れる言葉は決つと「ターキー」である。大した人氣である前年來阪の折は左程でもなかつたが、宣傳部の太鼓の打ち方がよかつたのであらう。こゝに妙なのは松竹の劇場で、吉本の漫才師文雄は盛んにボヤイて居た。

ターキーが來ると街中はまるで氣狂沙汰である。女房は亭主をホツタラかして歌舞伎座へ、旅館へ押し寄せる。大新聞までが、道順を記載する全く貴賓待遇以上であるけしからん、と彼はボヤくのである。然し彼はボヤクのが商賣である。

オリエの人氣も又素晴らしい。大阪花街ではターキー黨の藝者とオリエ最贔の仲居とが相反目して宴會等で時々チャンバラなんかをやつてのけ、醉客を唖然たらしめて居る。大和屋なんて一流處で、それが甚だしいから、まつたくもつて珍現象である。

記勝探目赤の野萬と貢

（生たんげ）

赤目口

といふところで降りた。案外驛には人かげがない。驛の前に乘合自動車が一臺、横に走り出しさうな面構へだ。構内を一歩出ると、驛前三軒ばかり、土産物を賣る店がある。若い女が、

「まァおはいやす」

「まァ休んでおいでやすいな」

「お荷物お預りしまつせ」

しまつせ——といふたかどうか、まアこんなアクセントで呼ぶのだが雜音が多くてきゝにくい。

「面白いなア」と扇雀さんが云やはつた鳩治郎はんみたいな顏して云やはつたのである。錦吾はんがお輕（忠臣藏のデスゝ）を家へ忘れて來たやうなかつこうをして、何がよかつたのか

「いゝですね」とおゝせあつた。

眞寫
筆　高田松竹通信係長者
扇雀　錦吾丈

一行は朝から九月浪花座の東西若手歌舞伎に「伊勢音頭」が出るので「油屋」を見學し、その歸りがけなのだ。それでこゝへ降りたらもう四時半はとつくに廻つてゐた。

「車で行きまんのでつか……」

「歩きなアるつもりだつか」

「オーイ、ハイヤ、持つてこい」

すると電車と同じ印を帽子につけた人が

「おあい憎さまですが、ハイヤはもうしばらくせんと戻つて來ませんのですが……」

といふ事になつて、我々は乘合で（しかし他に乘客はなかつた）赤目探勝と出かけたのである。ところが、正にところがです。この車たるや氣の荒い事、ボン〳〵からだをほうり出すのだ。

「胃の強いもんやないと乘れんなア」これは扇雀さんが云やはつたんとちがう。扇雀さんは默つてヨウカンをたべたはつたです。

三十分以上も搖られてガタリ――と前に一尺、ノメラされた瞬間車が止つた。

「ヘエ赤目だつせ」と運轉手。

「ヨウ辛棒しなはつたなア」

と、まるで年期奉公の娘の子が年期あけて里歸りして來た時の挨拶ミタイなことになる。

「もつと先までこの車行かんか」

「ヘエ、これから上はテクシーでどうぞ――ア、もうし〳〵バスの切符いたゞきます」

こゝの自動車屋は親切である。これから山へ登られて、お宿りですか、それともお歸りになるのですか、お歸りになるのだつたら、バスは六時半でしまいで、それからだとハイヤーを廻しときますが、たゞし値は一寸高くなりますと、教へてくれた。はじめ道は相當急勾配だが兩優は案外元氣だ。一寸信貴山へお詣りするとあるやうな見晴らしのよい處で、分讓地――とあるのをみて、

「この上の方で住んだらえゝやろな。しかし、大川さん（松竹の奥役さんで未だお若いですが）が役（役割のこと）をおさめに來るのに困るやろ」

と扇雀さんが商賣氣を出しやはる。

歌舞伎の俳優さんは出嫌いな人が多い。扇雀さんも、錦吾はんも、餘りハイキングなんかせないらしい。しかし兩

優なか〳〵健脚です。だがロイドが足が第一なら、兩優口が第一です？　そして三言に一言、イヽですね、ヨロシなア、の連續です。

たとへ牛ののろさでも（いや失言）行けば千里の外も見ゆですかな、溪に水が流れてゐるところへ出て來ました。だが瀧は未だ見つかりません。それからしばらく――そしてみつけたのは果して赤目四十八瀧の一つであらうかとイブカシく評議せざるを得んほどのものなのですが。

「オ、瀧や」と扇雀さんが瀧の一つに數へてしまやはる。

やゝ行くと奥山の方から妙齡の娘はん（老人の娘は餘りない）が唯一人向ふから降りて來た。

「ひなには稀れなる娘の子や」

と誰かが云つた。恰度目を止めるとそこに一本の立て札が立つてゐて、「あれが銚子瀧」ですとある、矢の方向を見上げると溪谷をへだてた向ふの絶壁に水あとらしい黑いあとのある岩がくつきりとそびえてゐる。だが水は一滴も落ちてゐるのではない。

「水がなかつたら瀧とちがうが」

と云つたのが家路を急ぐ娘とすれ違ふ時で娘は急に立ちどまつて、扇雀さんと錦吾はんの顔をしげ〳〵と見惚れてゐたが、

「あんたはん、あの峯のはなへ立ちやはつて、オヽチンコヽ出して小便しておみやす」

負けたです。よう云はんワ。

それからの一行はしばらく口をつぐんで歩いた。顔負けしたのである。道には溪に望んで幾軒かの茶店があつたが六時ともなれば皆店をしめて里の家に歸るらしく、お茶飲むところもなかつた。そして、これは瀧かなアとの評議のいらない大きな瀧に、素敵だ、素敵だ、と喝采をおくつた扇雀さんは羽織を脱いで。袴の股だちを高くとつて、

「新國劇や」と氣張つたはるし、錦吾はんは、これまた悠々たりである。とう〳〵曳布の瀧まで歩を運んだ。

やうやくにして暮色悄然、そのまた暮れなんとする雲の色、水の色、なんともかとも云ふに云はれぬヽ感じなのだ。ヒグラシの聲が、前に後にそれがこだまして靜寂そのものである。

「曳布――曳布、なるほどこゝのは曳布の感じですね」

と感嘆する。僕はビールの泡を思ひ出してゐたのだが兩

優は下戸である。

時計は六時を廻つてゐる。

「サア、そろ〳〵歸らんと熊が出まつせ」

熊が出たら怖いなアといふことになつて、どん〳〵急いだが、山の暮れは瞬間に來る。それでもやうやくにして、やゝ足元の明るいうちに、元の車の乘り場に歸つて來ることが出來たが、約束で待つてゐたハイヤーがマン惡くパンクを修繕をしてゐて、二十分はかゝるといふので、近くの茶店で休んだ。こゝで一つ最後を飾る土產話が出來た。

この邊の女の子は中々愛嬌がいゝ。それはさておき、扇雀さんをしげ〳〵とみてゐた若い女が「あんた役者はん？」と斬り込み、「サア誰やろ」といふことになる、この邊の娘が檜舞臺の俳優を知らないのは當然だが、二人してその紋をいじくつて「鳥の中に扇といふ字やつたら誰やろ」とさかんに首をひねつてゐたが、云ふことが面白い。

「長二郎ともちがうし、右太右衛門――ともちがうワ。そして、もつと偉い人なら、鴈治郎やけど、鴈治郎は死んだし」なのである。

歸りに自動車の中で扇雀さんは「お父さんはやつぱり偉い人だしたなア」と云やはつた。

洋酒・食料品　罐詰問屋

株式會社　横山商店

大阪市東區豐後町三番地

電話東94代表三八六五番

振替口座大阪二八四七番

創業明治五年

川柳 芝居街

岸本水府

幕外に日本一の自信あり

寺子屋のやうに子役の親が來る

タ一キ一の歸りよく似たのが歸り

斬りまくる割に美智子の弱い聲

下座の前端役ついでのしぐさする

劇評はけなした方が豪く見え

帽子ぬいで勝手知つたる樂屋裏

鴈治郎の部屋であつたに居る誇

洋服は女形とは見られまい

繪看板昭和は昭和らしく死に

小津第一回キート一飯田蝶子の「一人息子」

爽涼の訪れ
美術の秋！
映畫の秋!!

各會社とも、秋のシーズンこそは！ の意氣に燃えてゐる様子である。

松竹系統を見ても、先づ京都撮影所の衣笠監督が、オールスターキャストで『大阪城夏の陣』を製作して、今秋の一大スペクタクル作品たらしめるべく努力を傾注してゐる。封切りして間

秋の畫映

股野慶二郎

秋の書映

も無く冬の陣が初まるだらう……なぞと皮肉らずに、これは相當以上に見ごたえする物として期待する。

是はハツキリ云ひたいのだが、衣笠貞之助に期待するのでは無い彼を信頼して、莫大な撮影費を計上し、十二分の機構のもとに、製作を行はしめる、松竹キネマの金の掛けつぶり……換言すれば何んな豪華版的な内容を盛り上げるか？　に興味が繋がるのだ。そしてスタツフの中には、山田五十鈴や上山草人、藤野秀夫、齋藤達男などの名も見えて、往年の大忠臣蔵にも勝る事數段の大スペクタクル映畫となるのだ。

現代劇の方を見ると、非常時意識を強調した『少年航空兵』がある。海軍省、海軍航空本部、霞ヶ浦と横須賀の海軍航空隊が、積極的に松竹キネマに援助を與えて作らせたもの、日本で作られた空中映畫の決定版となるものだ。これもオールスター作品である。

同じ松竹系の新興キネマも、舊帝キネに代つて乘り出してから、早くも五周年、この『五才』を自祝して、秋のシーズンには、素晴らしいプランを練つてゐると云ふから秋から明新春へかけて注目すべきであらう。

◇

新興創立五周年記念
オールトーキー
「新日抄」霧立のぼる　立松晃　主演

映畫の秋

日本と云はず、海外諸國と云はず、何れの國の映國事業もスランプ狀態にある。日本の映畫會社はこの局面打開に、全く四苦八苦の暗雲な動き方だ。たゞ刹那々々の社會の動きだけに盲從してゐるに止まつて、何を握れば商賣になるか？　に達見がない。その段になると、外國映畫の方がシャレてゐて何か世人を驚倒させる物を生み出してゆく。トーキーがそれだつた。そして今秋は華麗を極める總天然色トーキーが日本へも輸入されて來た。なほ續々入荷するので、今の處でも判明してゐるのは早くも十數本に上り、來年あたりは總天然色トーキーの時代に入るだらうと云はれる。

「陣血の明黎」
尾上榮五郎
白石明子

口でこそテクニカラーだの着色映畫だのと呼ぶが、少くとも製作費は、單に白と黑の二色のフィルムに比してザツと二十倍を豫定せねばならない今までのトーキー大作級一本を二萬五千圓の費用と見れば、天然色では五十萬圓を要する。天

秋の畫映

然色であるが故に、コスチュームも、今までのように、何でも利用では駄目で相當に配色に注意して衣裳が用意されねばならない。更にまたセット撮影の際にも舞臺構成の係員が必要である。常に新しい途をゆく映畫が斯も多大の犠牲を拂つて觀衆の新しい欲求を滿たさねばならぬ處に製作當事者の苦しみがある。

この歐米映畫界の新傾向は、また日本にも齎らされて、既に松竹キネマ大船スタヂオでも有色映畫のために科學研究室が設備されたが、問題は、從來のフィルムの二十倍もの製作費を注いで、なほよく成算が立つか否かである。

日本映畫は暫く措いて、松竹系統の各地松竹座や、大阪辨天座等の洋畫劇場で封切りされる、今秋以後の天然色映畫には、それ〴〵の映畫會社の日本支社が頗る惱まされてゐる。

即ちオール發聲であるために、日本の觀衆むきには、何うしてもスーパーインポーズにせねばならない。しかし天然色に文字の挿入燒込みは大變な仕事で、八卷乃至十卷もので、スーパーインポーズするには、フィルム一本に一萬圓は消える。四本輸入されゝば、

松竹京都特作オールトーキー
「伊勢屋小判」
伊之助——阪東好太郎
紋次——高堂國典

新興特作
「海里百里」（音響版）
——市川男女之助——

か？それによつて、天然色トーキーを興行的に價値づけるか

忽ち四萬萬空になるのだ。これを節約して、解說者を附しては、トーキーとしての興味を殺がれてしまう。こゝで何處の洋畫會社が一番早く完成されたスーパーインポーズの天然色映畫を見せて呉れるが注目の的である。

最後に、現在の天然色は奇麗ではあるが、原色なので、色調の濃度が甚だしすぎる。そのために、却つて色彩派の繪を見る感じはあつても、映畫的な實質がマイナスされてしまう。研究はなほ今後に幾多殘されてゐると云へよう。

道頓堀

今月號より
二十錢
（一年—二圓二十錢）

秋の畫映

……は號月十誌本

社

で念記年周十刊創

す で 號 輯 特

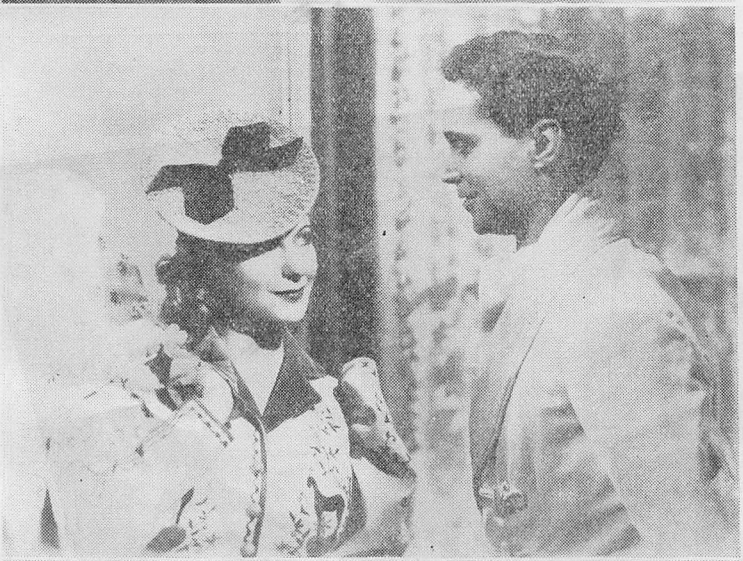
告

御 期 待 下 さ い !!

新興特作
オールトーキー
「潮黒の陸」
山路ふみ子
菅井一郎

映畫の秋

「妻と女秘書」
ジーン・ハーロー
クラーク・ゲエブル
ユーナ・ヨイ



「セミリア」
フランチョット・トー
グレース・ムーアー

「虎鮫島脱獄」
ワーナーバクスター

西区みなとまち
佐立半
電話番号三六三三番

編輯後記

✱先月號から大阪方の御大將が源多氏と交迭されて紙面も御覽の通り面目一新、今月號などは初秋の劇壇に花を添へる爽かな讀物揃ひで賑ひだ。

✱來號は愈々本誌十周年記念特輯號なる計畫で、あれやこれやとポランを錬るに大童だが、源多氏このところ恐ろしくハリ切つてゐるので京都方にどんな企劃を持ちかけて來るか、オチ〳〵としてはゐられない譯である。

✱グラフは浪花座に折からの若手歌舞伎の熱技をフイルム式に速報して本誌獨特のライカアンの活躍

（京都・大橋幸一郎）

◉値下げ斷行——本をよくして、多く刷つて、安くみていたゞく。このたて前から、今月から二十錢に値下斷行尙ドシ〳〵頁も增やし中間的面白い讀物も載せ、一面道頓堀誌十年の誇りを保たせる考へ引續き御愛讀をお願ひします。

◉月極愛讀者へ——既にお揃ひ込みになつておられます御購讀料は今後値下げ料金に換算し御送本申上げますから御了承下さい。それから、これも營業部からのお希ひですが、萬全を期するため御購讀料は何月まで殘つてゐますか御知らせ下さいましたら、幸甚です。

◉さて、御覽の通り、本號も冠頭より堂々の珠玉篇揃ひ。伊原青々園、長谷川伸、額田六福、食滿南北ら諸先生の玉稿は云はずもがな前號より覆面の健筆を振はれをる大木戸徹氏の「傍白」も、本號に入つて、光彩一段、鋭い觀察に一流の風刺ある縱橫無盡の筆陣は目覺しき限り。

◉一流の論陣に對し中間讀物陣も堂々たるもの。先づ本誌特輯の「鮮滿芝居の旅」ですが、成都暴虐事件等ある際どの角度からこれをお讀み下さつても必ず意義あるものと信じます。因に栗島狹衣氏は、栗島すみ子一座について旅を續けられたものでありました。紅文山人氏の「名女優戀愛放談帖」ちよつとホヽエマシキ十〻 の讀物として好もしきものでせうか。

●扇雀、錦吾兩優の赤目探勝記——これは今月浪花座に伊勢音頭が上場されるについて、去る二十三日藝熱心な兩優は伊勢古市の「油屋」へ見學に出かけ、その歸りがけすゝめられるまゝに歩を運んだものでした。

◉お詫び——他でもなく、來月本誌は創刊十周年記念號になりますので、今號にお寄せ下さいました諸先生の玉稿のうちこれに當てて編輯部の秘庫に殘るもの數篇に上つてゐます。中にも一流ジャナリストのエンマ帖集など、白眉たるものですが、來月號には全部お目にかけアツと言つて頂きます。

◉ドウトンボリセクションは號を追つていよ〳〵快調、ガンバレ、ガンバレ、の激勵をうけて來月は三段跳の決勝戰と敢へて前ぶれ。

◉前號よりの柳家幽太郎氏の「ゲテ物語」中井泰孝氏の「名優の鼻」その他殘念でしたが締切の間にあはず、次號のお樂しみに

◉いつも乍らの御後援御執筆御寄稿下さいました諸先生に謹んで御厚禮申上げます。

（大阪・源多德三郎）

昭和十一年九月一日發行
月刊雜誌『道頓堀』第十一年第百二十號

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の儘に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金二拾錢（郵壹錢五厘稅）

昭和十一年九月一日印刷
昭和十一年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 島江鎮也
共同編輯 山上貞一
松本泰三
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉
スキナ石鹸

專賣特許　常用新案

スキナ御化粧紙
（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年八月三十日印刷（毎月一回）
昭和十一年九月一日發行（一日發行）
「道頓堀」第百二十輯第十一年九月號

松竹大船特作トーキー

大毎、東日連載・菊池寛氏原作

新道

前篇・朱實の巻
後篇・良太の巻

田川佐佐齋山
中崎原分利野藤内
絹弘周達
代子謙信二雄光

現代生活と戀愛道の新分野に絢爛の表現美！

五所平之助監督作品

「道頓堀」 第百二十輯 第十一年 九月號

一部 金貳拾錢